倭の五王

佃　収

はじめに

日本国民は「倭の五王」についてほとんど知らない。「歴史学者」が「倭の五王」は『古事記』、『日本書紀』に出てくる「天皇」と考えているからである。したがって「倭の五王」については研究する必要はない。『古事記』『日本書紀』を読めばよいと思っているのであろう。

そしてすべての「歴史学者」は「雄略天皇＝倭王武」説である。これだけは「間違いない」という。

「雄略天皇」＝「倭王武」＝「ワカタケル大王」説は今の「日本の歴史」の定説になっている。

ところが「倭王武」の在位と「雄略天皇」の在位はほとんど合わない。「雄略天皇」の在位は「倭王興」の在位とほぼ一致する。『日本書紀』は「倭王興」を「雄略天皇」として記述している。

２０２２年9月25日に「埼玉県立歴史と民俗の博物館」で「倭の五王」について講演をした。日本国民に「倭の五王」について広く知ってもらいたいと思い、そのときの「講演資料」を本誌に載せることにした。

「概略」は次の通り。

○「倭の五王」はそれぞれどのような活躍をしたのか

○どのようにして「日本列島」や「朝鮮半島南部」を支配したのか

○「倭の五王」の墓はそれぞれ活躍した地に造られている。

○「倭の五王」の墓はどれか

○「倭の五王」は中国の大凌河上流の「倭城」から渡来した「倭人（卑弥氏）」である。

「卑弥呼」の先祖も「倭城」から大凌河を下り、「前50年」頃、朝鮮半島南部に「倭国」を樹立する（講演資料外）。

「230年頃」、「卑弥呼」が「倭国」から「北部九州」に渡来して、「伊都国王権」を破り、魏へ朝貢して「親魏倭王」になる。「日本列島」に初めて「倭国」が誕生する（講演資料外）。

□「390年」に「倭城」から「倭讃、珍」が渡来して「倭の五王」の「倭国」を建国する。

■日本列島に二回目の「倭国」が誕生する。

■「倭国（倭の五王）」は「日本列島」、および「朝鮮半島南部」を支配する。

等々について述べている。

第1章　「倭の五王」の「倭国」の成立

1　「倭の五王」とは

(1)　『宋書』の「倭王」

・「倭の五王」全史料　（古田武彦著『古代は輝いていたⅡ』（朝日新聞社））（巻末）

『宋書』は「倭の五王」について次のように記す（「倭の五王」全史料より）。

○「倭讃」と「倭珍」

・「4」…（①）高祖の永初二年（421年）、詔して曰く、「倭讃、万里貢を修む。遠誠宜しく甄（あらわ）すべく、除授を賜う可し」と。

・「5」…（②）太祖の元嘉二年（425年）、讃、又司馬曹達を遣わして表を奉り、方物を献ず。讃死して弟の珍立つ。

○「倭王済」

・「9」…（③）二十年（文帝、元嘉二十年＝443年）、倭国済、使を遣わして奉献す。復た以て安東将軍倭国王と為す。

○「倭王興」

・「14」…（⑤）済死す。世子興、使を遣わして貢献す。世祖の大明六年（462年、孝武帝）、詔して曰く、「倭王世子興、奕世戴（すなわ）ち忠…

○「倭王武」

・「17」…（⑥）興死して弟の武立ち、自ら使持節都督、倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大将軍倭国王と称す。順帝の昇明二年（478年）、使を遣わして表を上る。

この「讃・珍・済・興・武」が「倭の五王」である。

（添付資料1…『宋書』倭国伝）

(2) 倭王武の上表文

「倭王武」は即位すると「478年5月」に宋へ朝貢する。

順帝昇明二年、遣使上表曰、封国偏遠作藩于外。自昔祖禰躬擐甲冑跋渉山川不遑寧処、東征毛人五十五国、西服衆夷六十六国、渡平海北九十五国。王道融泰廓土遐幾累葉朝宗不愆于歳。臣雖下愚忝胤先緒駆率所統帰崇天極道遙。百済装治船舫而高句麗無道……。

『宋書』倭国伝

（訳）順帝の昇明二年（478年）、（倭王武）使いを遣わし上表して曰く、「封国は偏遠にして藩を外に作る。昔より祖禰躬（みずか）ら甲冑をつらぬき、山川を跋渉し、寧処（安心して生活する）に遑（いとま＝ゆとり）あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平らげること九十五国。（後略）

○「倭の五王」の征服地域

■「東は毛人を征すること五十五国」　…　東日本

■「西は衆夷を服すること六十六国」　…　西日本

■「渡りて海北を平らげること九十五国」　…　朝鮮半島

□「倭の五王」は「西日本」「東日本」「朝鮮半島」を征服している。

■「倭王武」の最初の朝貢の上表文に記述されているから倭王武の前の4人の倭王（讃・珍・済・興）が征服している。

(3) 「倭の五王」の系図

『宋書』、「松野連系図」から判明する「倭の五王」の系図

（添付資料2…「松野連系図」）

図1 「倭の五王」の系図

○「倭の五王」の系図

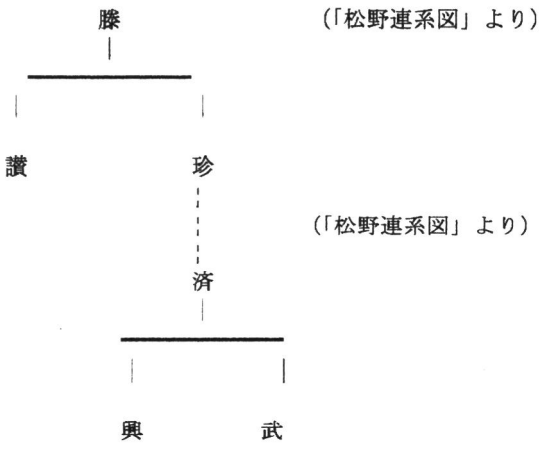


図1 「倭の五王」の系図

2 「倭の五王」の従来説

(1) 「倭の五王＝大和の天皇」説

今の「日本の歴史」では「倭の五王」は『古事記』『日本書紀』に出てくる天皇であるとしている。

○「倭の五王」の本拠地は「大和」である。（定説）

(2) 「雄略天皇＝倭王武」説

「日本の歴史学」では次のようになっている。

■「倭王讃＝応神天皇」説、「倭王讃＝仁徳天皇」説がある。

■「倭王珍、済、興」も種々の説がある。

しかし「雄略天皇＝倭王武」は間違いない。「歴史学界」はこれで統一している。

3 「倭讃・珍」の渡来

(1) 遼西の事件

「390年」に「遼西」で事件が起きる。

（孝武帝太元十五年（３９０年））九月、北平人呉柱聚衆千餘、立沙門法長為天子、破北平郡、転寇廣都、入白狼城。（白狼縣、前漢属右北平郡、後漢、晋省。魏收地形志：後魏真君八年、置建徳郡、治白狼城、廣都属焉。燕時當属北平郡。）燕幽州牧高陽王隆方葬其夫人、郡縣守宰皆会之、衆聞柱反、請隆還城、遣大兵討之。隆曰：「今閭閻安業、民不思乱、柱等以詐謀惑愚夫、誘脅相聚、無能為也」。遂留葬訖、遣廣平太守、廣都令先帰、（「廣平」當作「北平」）続遣安昌侯進将百餘騎趨白狼城、柱衆聞之、皆潰、窮捕、斬之。

『資治通鑑』

（訳）北平人の呉柱は衆千餘を聚（あつ）めて、沙門の法長を立てて天子と為し、北平郡を破り、転じて廣都を寇（おか）し、白狼城に入る。燕・幽州牧の高陽王隆は方（まさ）に其の夫人の葬儀をしているところであった。郡・縣の守宰は皆之（葬儀）に参列していた。衆（人々）は呉柱が反（そむ）いたのを聞く。高陽王隆は城に還り、大兵を遣わして之を討つことを請う。（中略）遂に葬儀の訖（おわ）るのを留めて、廣平太守を遣わし、廣都令を先に帰らせ、続いて安昌侯を遣わし、将に百餘騎を進めて、白狼城へ趨（はし）る。呉柱の衆は之を聞き、皆潰（つぶ）れ、窮（きわま）り、捕えて之を斬る。

(2) 「倭城」と呉柱事件

「北平郡を破り、転じて廣都を寇（おか）し、白狼城に入る」とある。

「倭城」は「北平郡」にあり、「白狼城」に近い。「倭城」はこの事件に巻き込まれたのであろう。「倭讃・珍」の父は渡来していない。この戦いで戦死したのであろう。

「倭讃・珍」は五島列島を通り、有明海に入り、「矢部川」を遡り、「福岡県八女郡広川町」に渡来する（佃説）。

図２　倭城

(3) 「倭の五王」は中国人の名前

「倭讃（サン）」、「珍（チン）」は「中国人の名前」である。「倭讃・珍」が中国からの渡来人であることを示している。

「倭人（卑弥氏）」は、「前４７３年」の「呉越の戦い」の時に「呉地方」から「黄河下流域」を経て、「前３００年」頃、大凌河の上流に「倭城」を建国する。

「３９０年」に「倭城」から「倭讃・珍」が日本列島（福岡県八女郡）に渡来する。この間の「約７００年」は中国の遼西地方で「中国人」と共存している。当然「中国化」するであろう。

「倭の五王」の名前は皆「一字」である。「讃・珍」の父親も「一字名」である。渡来した後も「中国人の名前」を付けている。

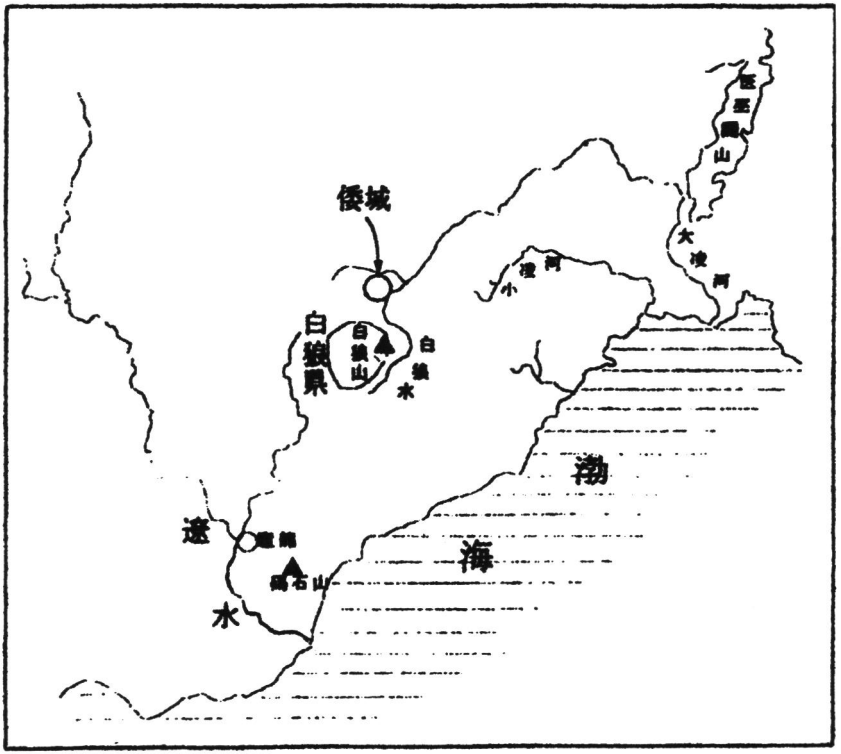


図２　大凌河上流の白狼水と倭城

□「倭人（卑弥氏）」は「７００年」間も大凌河の上流で「中国人」と住んでいる。当然「中国化」するであろう。

■しかし「倭人（卑弥氏）」であることを忘れてはいない。「倭城」が攻められたとき「日本列島」へ逃げてきている。

■先祖（大彦、卑弥呼の先祖）が「日本列島へ渡った」ことが語り継がれていたのであろう。

■そのため「倭城」から直接「日本列島」に渡来している。

4　貴国の衰退

(1)　「３９１年」「３９２年」は貴国の全盛期

■「３６４年」に中国から「多羅氏」が渡来して、「熊襲征伐」をして、「筑前・肥前」に「貴国」を建国する。（55号）

■「３９１年」に「貴国」は「百済・新羅」を臣民にする。（「好太王碑」）

■「３９２年」に百済の辰斯王が貴国の天皇に無礼。４人の宿祢（将軍）を派遣して責めると百済国は辰斯王を殺して謝る。

○「倭讃・珍」が渡来したのはこの時期である。

(2)　「４０７年」に貴国は高句麗と戦う

○壊滅的な打撃を受ける。

5　「倭国」の樹立

(1)　「４１０年」頃「貴国」を追い出す

「４０７年」に貴国が壊滅的な打撃を受けたのを見て、「倭讃・珍」は貴国を攻め、貴国を追い出す。

■貴国最後の仁徳天皇は難波（大阪）へ逃げる。

■貴国が在った「筑前・肥前」は「倭讃・珍」の領土になる。

□「倭の五王」は膨大な領土を得る。（最初の征服である）

(2)　「倭讃」による「倭国」の樹立（佃説）

「４１２年」頃、「倭讃」は広川町に「倭国」を樹立する。「倭讃・珍」は「倭城」の「卑弥氏」である。「卑弥氏」は「倭国」を称する。

□「412年」頃、「倭讃」は福岡県八女郡広川町に「倭国」を建国して「倭王」になる。

(3) 「倭王讃」による最初の朝貢

「413年」に「倭王讃」は「晋」へ朝貢する。

■晋の安帝（396年～418年）の時、倭王賛有り。
『梁書』倭伝

■「2」（晋安帝、義熙九年（413年））是の歳、高句麗・倭国及び西南の銅頭大師、並びに方物を献ず。
『晋書』安帝紀

（まとめ）

□「390年」頃、「倭讃・珍」が「倭城」から渡来する。

■「倭讃・珍」は福岡県八女郡広川町に住み着く。

■「410年」頃、貴国を追い出す。

■「412年」頃、「倭讃」は「倭国」を樹立して「倭王讃」になる。

■「413年」に初めて「晋王朝」へ朝貢する。

第2章　「倭の五王」の在位　（佃説）

（注）「歴史」を研究するには「時間（年代）」と「空間（場所）」を解明することから始めるべきである。（（A本）の「おわりに」）

ところが「倭の五王」の在位を調べた人は一人もいない。

1　「倭王讃」の在位

(1) 「倭王讃」の最初の記録

「413年」に「倭王讃」は晋王朝へ初めて朝貢する。

■晋の安帝（396～418年）の時、倭王賛有り。
『梁書』倭伝

■「2」（晋安帝、義熙九年（413年））是の歳、高句麗・倭国及び西南の銅頭大師、並びに方物を献ず。
『晋書』安帝紀

「410年」頃、「倭讃・珍」は貴国を追い出している。「413年」の晋への朝貢が「倭王讃」の最初の朝貢である。

□「倭王讃」の即位は「412年」頃と見てよいであろう。

(2) 「倭王讃」の朝貢

「倭王讃」は「421年」「425年」にも朝貢する。

■「4」（①）高祖の永初二年（421年）、詔して曰く、「倭讃、万里貢を修む。遠誠宜しく甄（あらわ）すべく、除授を賜う可し」と。

■「5」（②）太祖の元嘉二年（425年）、讃、又司馬曹達を遣わして表を奉り、方物を献ず。讃死して弟の珍立つ。使いを遣わして貢献し、自ら使持節・都督（後略）。

「425年」の朝貢の後に「讃死して弟の珍立つ」とある。「425年」の朝貢の後に「倭王讃」は死去している。「倭王讃」は「426年」頃に死去したと考えてよいであろう。

□「倭王讃」の在位

■「412年」頃に即位する。

■「426年」頃に死去する。

■「倭王讃」の在位は「412年～426年」頃である。

2 「倭王珍」の在位

(1) 「倭王珍」の最初の朝貢

「倭王珍」の最初の朝貢は「427年」であろう。

■「5」（②）太祖の元嘉二年（425年）、讃、又司馬曹達を遣わして表を奉り、方物を献ず。讃死して弟の珍立つ。使いを遣わして貢献し、自ら使持節・都督（後略）。

「426年」に「倭王讃」が死去して、翌年の「427年」に「倭王珍」が朝貢していると考えられる。

(2) 「倭王珍」の朝貢

「倭王珍」は「430年」「438年」にも朝貢する。

■「6」（a）（文帝、元嘉七年＝430年、春正月）是の月、倭国王、使を遣わして方物を献ず。《珍》

■「7」（b）（文帝、元嘉十五年＝438年、夏四月）己巳、倭国王珍を以て安東将軍と為す。

■「8」（c）（文帝、元嘉十五年＝438年）是の歳、武都王・河南国・高麗国・倭国・扶南国・林邑国、並びに使を遣わして方物を献ず。《珍》

「443年」には「倭王済」が朝貢する。

■「9」（③）二十年（文帝、元嘉二十年＝443年）、倭国済、使を遣わして奉献す。復た以て安東将軍倭国王と為す。

「倭王」は即位すると直ちに「宋」へ朝貢する。したがって「倭王珍」は前年の「442年」に死去したと考えられる。

□「倭王珍」の在位は「427年～442年」であろう。

3 「倭王済」の在位

(1) 「倭王済」の最初の朝貢

前述のように「倭王済」の最初の朝貢は「443年」である。

□「倭王済」は「443年」に即位している。

(2) 「倭王済」の朝貢

「倭王済」は「443年」「451年」「460年」に朝貢している。

■「9」（③）二十年（文帝、元嘉二十年＝443年）、倭国済、使を遣わして奉献す。復た以て安東将軍倭国王と為す。

■「10」（d）（文帝、元嘉二十年、443年）是の歳、河西国・高麗国・百済国・倭国、並びに使を遣わして方物を献ず。《済》

■「11」（④）（文帝、元嘉二十八年＝451年）使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東将軍は故の如く、并びに上（たてまつ）る所の二十三人を軍郡に除す。《済》

■「12」（e）（文帝、元嘉二十八年＝451年）秋七月甲辰、安東将軍倭王済、安東大将軍に進号す。

■「13」（f）（孝武帝、大明四年＝460年、十二月丁未）倭国、使を遣わして方物を献ず。《済》

■「14」（⑤）済死す。世子興、使を遣わして貢献す。世祖の大明六年（462年、孝武帝）、詔して曰く、「倭王世子興、奕世戴（すなわ）ち忠、藩を外海に作（な）し、化を稟（う）け境を寧（やす）んじ、恭しく貢職を修め、新たに辺業を……。

「14」に「済死す。世子興、使を遣わして貢献す。世祖の大明六年（462年、孝武帝）、詔して曰く、」とある。「倭王済」が死去して、次の「倭王興」が「462年」

に朝貢している。

「倭王済」は「461年」に死去しているのであろう。

□「倭王済」の在位は「443年～461年」であろう。

4 「倭王興」の在位

(1) 「倭王興」の最初の朝貢

「倭王興」は前述のように「462年」に最初の朝貢をしている。

「倭王興」は「462年」に即位している。

(2) 「倭王興」の朝貢

「倭王興」は「462年」「477年」に朝貢する。

■「14」（⑤）済死す。世子興、使を遣わして貢献す。世祖の大明六年（462年、孝武帝）、詔して曰く、「倭王世子興、奕世戴（すなわ）ち忠、藩を外海に作（な）し、化を稟（う）け境を寧（やす）んじ、恭しく貢職を修め、新たに辺業を嗣ぐ。宜しく爵号を授くべく、安東将軍倭国王とす可し」と。

■「15」（g）（孝武帝、大明六年＝462年、三月）壬寅、倭国王の世子、興を以て安東将軍と為す。

■「16」（h）（順帝、昇明元年＝477年）冬十一月己酉、倭国、使を遣わして方物を献ず。《興》

■「17」（⑥）興死して弟の武立ち、自ら使持節都督、倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大将軍倭国王と称す。順帝の昇明二年（478年）、使を遣わして表を上る。曰く、「封国は……（中略）……以て忠節を勤

「興死して弟の武立ち、自ら使持節都督、倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大将軍倭国王と称す。順帝の昇明二年（478年）、使を遣わして表を上る。」とある。

「倭王興」が死去して、弟の「倭王武」が「478年5月」に朝貢している。

「倭王興」は「477年末～478年4月」の間に死去しているのであろう。

「477年末」に死去したとしておく。

□「倭王興」の在位は「462年～477年」であろう。

5 「倭王武」の在位

(1) 「倭王武」の最初の朝貢

「倭王武」の最初の朝貢は前述のように「478年」である。「478年」に即位している。

(2) 「倭王武」の朝貢

「倭王武」は「478年」「479年」「502年」に朝貢している。

■「18」（i）（順帝、昇明二年＝478年）五月戊午、倭国王武、使を遣わして方物を献ず。武を以て安東大将軍と為す。

■「19」建元元年（479年、高帝）進めて新たに使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・（慕韓）六国諸軍事、安東大将軍倭王武に除し、号して鎮東大将軍と為さしむ。『南斉書』倭国伝

■「20」（①）（高祖武帝の天監元年＝502年）鎮東大将軍倭王武を進めて征東将軍に進号せしむ。『梁書』帝紀

「倭王武」は「502年」まで朝貢している。

その後の朝貢の記録は無い。「倭王武」はその後も在位している。（後述）

□「倭王武」の在位は「478年～502年以降」まで。

□「倭の五王」の在位（まとめ）

■倭王讃　…　412年　～　426年
■倭王珍　…　427年　～　442年
■倭王済　…　443年　～　461年
■倭王興　…　462年　～　477年
■倭王武　…　478年　～　502年以降（後述）

6 「雄略天皇」≠「倭王武」

(1) 「雄略天皇」の在位

『日本書紀』の「雄略紀」では「雄略元年＝457年」であり、雄略天皇の崩年は「479年」である。

「雄略天皇」には『古事記』に崩年干支があり、「489年」に死去している。

一方、「倭王武」の在位は「478年～502年以降」までである。

□雄略天皇と倭王武の在位

■雄略天皇　…　457年～479年（489年）

■倭王武　…　478年～502年以降まで

「雄略天皇」と「倭王武」の在位は全く合わない。

□雄略天皇　≠　倭王武

(2)「雄略紀」は「倭王興」の記録

「倭王興」の在位は「462年～477年」である。

「雄略紀（雄略天皇の在位）」は「457年～479年」である。

○「雄略紀」は「倭王興」の在位とほぼ一致している。

□『日本書紀』「雄略紀」は「倭王興」の記録である。

(3)「雄略紀」＝「倭王興の記録」の検証

「462年3月」に「倭王興」は「安東将軍倭国王」に任命される。

■（孝武帝、大明六年（462年三月）壬寅、倭国王の世子、興を以て安東将軍と為す。　『宋書』帝紀

翌月の「462年4月」に呉（宋王朝）から使者が来る。「倭王興」にそれを伝えるためであろう。『日本書紀』に次の記事がある。

■（雄略）六年（462年）四月、呉国、使を遣わして貢献する。　『日本書紀』

呉国（宋王朝）は日本へ使者を派遣して倭王興に「安東将軍」に任命されたことを伝えているのであろう。

○『宋書』と『日本書紀』の記録は整合している。

□「雄略紀」は「倭王興」の記録である。

(4)「雄略紀」の天皇の本拠地

『日本書紀』「雄略紀」に「464年」に「身狭村主青・檜隈民使博徳を呉国に使わす」とある。

■（雄略）八年（464年）、身狭村主青・檜隈民使博徳を呉国に使わす。

■（雄略）十年（466年）、身狭村主青等、呉の献じた二つの鵝（がちょう）をもって筑紫に到る。是の鵝は水間君の犬に噛まれて死ぬ。　『日本書紀』

「身狭村主青」は阿智王に呼ばれて渡来した「牟佐村主」

の子孫であろう。「肥前」に住んでいる（後述）。

「466年」に身狭村主青・檜隈民使博徳は呉から帰国する。「筑後の三潴（水間）」に上陸している。

「雄略紀」が「雄略天皇紀」であれば「身狭村主青等」は「大和」に帰るはずである。しかし「筑後の三潴」に上陸している。

「筑後の三潴」から東へ行くと「八女市」である。「倭の五王」の本拠地である。

「身狭村主青等」が「三潴」に上陸しているのは「倭王興」の本拠地が筑後にあるからである。

このように『日本書紀』「雄略紀」と『宋書』は良く整合している。

□「雄略紀」の天皇（倭王興）の居所は「筑後の八女」である（後述）。

第3章　倭王讃

1　倭王讃と阿知使主

(1)　阿智王の渡来

「阿智王」が中国の戦乱を避けて日本へ来る。

姓氏録第二十三巻に曰く、阿智王
誉田天皇の御世、本国の乱を避け、母並びに妻子、同母弟迂興徳、七姓の漢人等を率いて帰化する。（中略）天皇、その来たる志を矜（あわれ）み、阿智王を号して使主と為す。仍りて大和国桧隈郡郷を賜り、之に居す。時に阿智使主、奏して言う、臣、入朝の時、本郷の人民は往きて離散す。今聞く、遍（あまね）く高麗・百済・新羅等の国に在りと。望むらくは使いを遣わし、喚び来るを請う。天皇、即ち使いを遣わし之を喚ぶ。大鷦鷯天皇の御世、落（村落）を挙げて随い来る。今の高向村主・西波多村主・平方村主・石村村主・飽波村主・危寸村主・長野村主・俾加村主・茅沼山村主・高宮村主・大石村主・飛鳥村主・西大友村主・長田村主・錦部村主・田村村主・忍海村主・佐味村主・桑原村主・白鳥村主・額田村主・牟佐村主・甲賀村主・鞍作村主・播磨村主・漢人村主・今来村主・石寸村主・

金作村主・尾張吹角村主等、是其の後なり。

『新撰姓氏録』逸文

「誉田天皇の御世、本国の乱を避け、母並びに妻子、同母弟迂興徳、七姓の漢人等を率いて帰化する。」とある。

「誉田天皇」は「応神天皇」である。

応神天皇には『古事記』に崩年干支があり、「３９４年」に死去している。

貴国が全盛の時代である。

「大鷦鷯天皇の御世、落（村落）を挙げて随い来る。」とある。

「大鷦鷯天皇」は「仁徳天皇」である。

「仁徳天皇」にも崩年干支があり、「４２７年」に死去している。

(2) 「30村」の誕生

阿智王が喚び寄せると「30村主（すぐり、村長）」が誕生している。「30の村」ができたのである。

「阿智王を号して使主と為す。仍りて大和国桧隈郡郷を賜り、之に居す」とある。しかしこれは間違いである。大和に「檜隈郡」は無い。「檜隈」は「佐賀県鳥栖市原古賀町」の「日の隈（檜隈）」である（79号）。

図３　肥前の「日の隈（檜隈）」

（提言②　p２６８）

□阿智王は「肥前」に来ている。

「30村」に「飛鳥村」がある。「肥前の飛鳥」である（79号）。「大和の飛鳥」は「６５６年」に「皇極」が「肥前の飛鳥」から大和へ逃げて、「大和」に初めて「飛鳥」が誕生する（79号）。

「30の村」は「肥前」に誕生している。その中に「牟佐村主」がいる。

「牟佐」＝「身狭」である。「身狭村主青」はその子孫であろう。

(3) 「倭王讃」と阿知使主

「阿知使主」の渡来は『日本書紀』にも記述されている。

（応神）二十年九月、倭漢直の祖阿知使主が其の子都加使主、並びに己の黨類（ともがら）十七縣を率いて来帰（く）る。　『日本書紀』

『新撰姓氏録』「阿智王」では「誉田天皇（応神天皇）の御世」に渡来したと記す。「応神天皇」は「３９４年」に死去している。貴国の全盛期である。「肥前の檜隈（日の隈）」には貴国の人々が住んでいる。中国からの逃亡者を住まわせる土地は無いであろう。

五本谷
中の坪
椿谷
四の坪
原古賀町
三本松
一本松
柏
平田原
日の隈
田山公園
△1330
朝日
安良
岩井手
赤沼
浦田
村田町
一本松

図3　日の隈

「応神紀」の年代は間違っている。年代を復元すると「（応神）二十年」は「４１２年」頃になる（復元④）。

「４１２年」は「倭王讃」が貴国を追い出して「倭国」を樹立した時期である。「肥前の土地」は空地になっている。

□「４１２年」頃、倭王讃は中国から朝鮮半島へ逃げていた人々を呼び寄せて肥前に住まわせる。

■肥前に「30村」が誕生する。

「（応神）三十七年」に阿知使主（あちおみ）は中国の「呉（宋王朝）」へ派遣される。

（応神）三十七年二月、阿知使主・都加使主を呉に遣わし、縫工女を求めしむ。

（応神）四十一年二月、天皇、明宮に崩ず。是月、阿知使主等、呉より筑紫に至る。時に胸形大神、工女等を乞う有り。故、兄媛を以て胸形大神に奉る。是則ち、今筑紫国に在る御使君の祖なり。すでにして其の三婦女を率いて以て津国に至り、武庫に及ぶ。而して天皇、之に崩じ、及ばず。　『日本書紀』

阿知使主は「（応神）三十七年」に「呉（宋王朝）」に派遣されて、「（応神）四十一年」に帰って来る。

「（応神）三十七年」は「４２２年」であり、「（応神）四十一年」は「４２６年」である（54号、復元④）。

「（応神）三十七年（４２２年）」、「（応神）四十一年（４２６年）」に「呉（宋王朝）」と交流しているのは「倭王権（倭の五王）」である。

「阿知使主等、呉より筑紫に至る」とあり、「津国に至り、武庫に及ぶ」とある。

「津国」は「島原半島」であり、「武庫」は「佐賀市諸富町諸富津」である（42号）。

「阿知使主等」は有明海に入り、筑後川の「諸富津」に上陸している。

図４　武庫（佐賀市諸富町諸富津）
（42号　住吉町（榎津）と諸富津）

「４２２年」、「４２６年」は「倭王讃」の時代である。『日本書紀』「応神紀」の天皇は「倭王讃」であることがわかる。

阿知使主は「４２６年」に帰国する。その直前に「倭王讃」は崩じる。（54号、復元④）

「倭王讃」の本拠地は「八女郡広川町」である。

「阿知使主」は「倭王讃」の命令で呉へ派遣され、「筑後」へ帰って来て「倭王讃」に帰国の報告をするはずであった。ところが「倭王讃」は直前に死去する。阿知使主はひとまず自宅（日の隈）に帰ったのである。

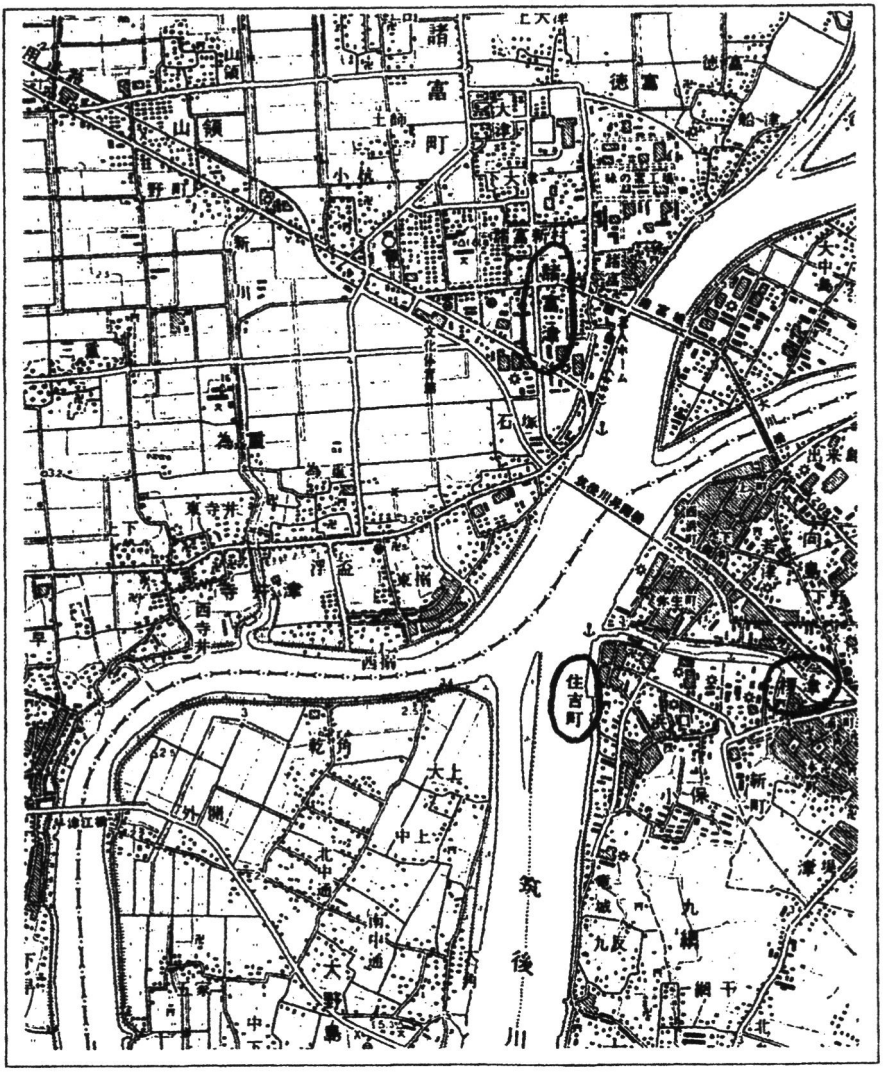


図４　（「佐賀南部」国土地理院　平成10年７月28日発行）

2　倭王讃と称号「連（むらじ）」

(1)「宿禰」と「連（むらじ）」の称号

『先代旧事本紀』（『旧事本紀』と略）に、「物部氏」の「八世」の孫に「物部膽咋（いぐい）宿禰」が居る。

八世孫物部武諸隅（たけもろずみ）連公　（新河大連の子なり）
孫物部膽咋（いぐい）宿禰　（十市根大連の子なり）
此の宿禰は志賀高穴穂宮御宇天皇（成務天皇）の御世に元（はじめて）大臣となる。次に宿禰と為る。
（中略）其の宿禰の官は始めてこの時に起これり。
『旧事本紀』

「物部膽咋（いぐい）宿禰」には「宿禰」の称号がついている。

「宿禰」の称号は「貴国」の称号である。

「其の宿禰の官は始めてこの時に起これり」とある。

□「364年」に「貴国」が肥前に建国される（55号）。

○「物部膽咋（いぐい）宿禰」は「貴国」から「宿禰」の称号を賜っている。

■「364年」以降に「物部氏」は「貴国」の支配下に入っていることがわかる。

『旧事本紀』「天孫本紀」の「九世孫物部多遅麻（たじま）連公」の孫に「孫物部五十琴（いごと）宿禰連公」が居る。

九世孫物部多遅麻（たじま）連公　（武諸隅大連の子なり）
孫物部五十琴（いごと）宿禰連公　（膽咋宿禰の子なり）
『旧事本紀』

「物部五十琴（いごと）宿禰連公」は「膽咋宿禰の子なり」とある。

「物部五十琴宿禰連公」には「宿禰」と「連」の称号が付いている。

その子「物部伊莒弗連公」には「連」の称号だけである。

十世孫物部印葉（いにば）連公　（多遅麻大連の子なり）
此の連公は軽島豊明宮御宇天皇（応神天皇）の御世に拝して大連となる。
孫物部伊莒弗連公　（五十琴宿禰の子なり）
『旧事本紀』

「物部五十琴（いごと）宿禰連公」には「宿禰」と「連」の両方の称号が付いている。「物部五十琴（いごと）」は「貴国」の支配下にあり、その後「倭国」の支配下に入っていることがわかる。

「物部五十琴（いごと）」の時に「貴国」から「倭国」に交代している。

「４１０年」頃、「倭王讃」は「貴国」を追い出す。「物部五十琴（いごと）」は丁度その時期に居たことがわかる。

したがって称号「連」は「倭王讃」がつけた称号である。

□「倭王讃」は称号「連（むらじ）」を制定する。

■「連」は「倭の五王（倭王権）」の称号である。

■「物部氏」の本拠地は「筑前の鞍手郡」である。

■「倭王讃」は「北部九州全域」を征服していることがわかる。

（注）「八世孫物部武諸隅（たけもろずみ）連公」とある。物部氏が「宿禰」の称号を与えられる前の人物である。「連」の称号はまだ制定されていない。したがってここに「物部武諸隅（たけもろずみ）連公」とあるのは『旧事本紀』を記述するときに勝手につけたのであろう。

３　倭王讃の墓

(1)　石人山古墳

「石人山古墳」は八女郡広川町にある。広川町を見下ろすような岡の上にある。全長１３０ｍの前方後円墳である。

「石人山古墳」は広川町を治めた「王」の墓にふさわしい。

石人山古墳は「５世紀前半」の古墳であるという。「倭王讃」は「４２６年」頃に死去している。石人山古墳は「倭王讃」の墓であろう。

□「石人山古墳」は「倭王讃」の墓である。

(2)　石人・石馬

石人山古墳の上には大きな「石人」が立ててあった。今は石人山古墳の前の建物に収めてあり、常時見ることができる。

この巨大な「石人」は優れた石工技術で作られていることがわかる。

日本列島にはこのような石工技術は存在しなかった。

「倭王讃・珍」が日本へ優れた石工技術をもたらしたのであろう。

北部九州に「石工文化」が広まる。

図５　九州における石人・石馬類の分布

（原田大六著『磐井の叛乱』（河出書房新社）、復元⑤ p14）

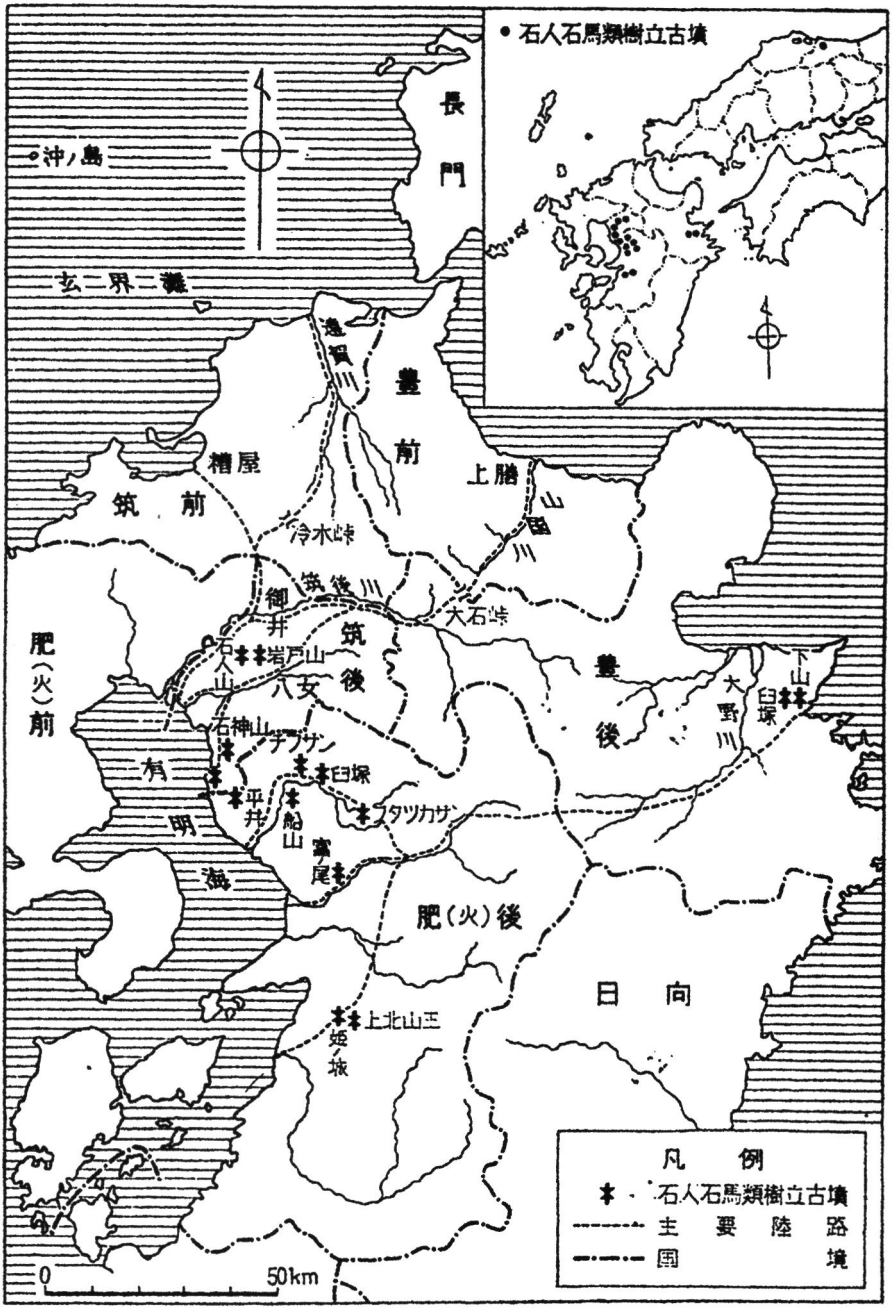

石人石馬類樹立古墳
沖ノ島
長門
玄界灘
豊前
上膳
山国川
槽屋
筑前
冷水峠
筑後川
御井
大石峠
筑後
石人山
岩戸山
八女
肥(火)前
石神山
ヲブサン
有明
平井
船山
臼塚
フタツカサン
宮尾
海
肥(火)後
豊後
大野川
下山
臼塚
日向
上北山王
姫ノ城
凡例
石人石馬類樹立古墳
主要陸路
国境
0
50km

図5　石人・石馬の分布

表1　石製表飾品発見古墳一覧

県	古墳名	所在地	石製品	墳形	埋葬施設
福岡	石神山	筑後・三池郡高田町上楠田	武装石人一	前方後円	船形石棺三
	石人山	筑後・八女郡広川町一条	武装石人一・他	前方後円	横穴式石室
	岩戸山	筑後・八女市長峰・吉田	武装石人・裸体石人・馬・鶏・水鳥・猪・靫・盾・刀・坩・槌・鬣	前方後円	横口家形石棺(装飾)
	豊福古墳群	筑後・八女市豊福	武装石人一	前方後円・円	不明
	稲荷山	筑後・大牟田市稲荷山	短甲一	不明	不明
熊本	三ノ宮神社	肥後・荒尾市平井手・三ノ宮神社	武装石人一	前方後円	不明
	船山古墳群	肥後・玉名郡菊水町江田・清原	武装石人一・腰掛(机?)一・刀・小家形棺一	前方後円・円	横口家形石棺、他
	チブサン	肥後・山鹿市城・西福寺	人物一	前方後円	横穴式石室(装飾)
	臼塚	肥後・山鹿市石	武装石人一	円	横穴式石室(装飾)
	フタツカサン	肥後・菊池市木柑子	人物一	前方後円	横穴式石室
	富ノ尾古墳群	肥後・熊本市池田町富ノ尾	人物一	前方後円・円	横穴式石室(装飾)
	イシノムロ	肥後・下益城郡城南町塚原	蓋の柄?	円	横口家形石棺(装飾)
	姫ノ城古墳	肥後・八代郡竜北村大野・北川	鬣三・蓋二	前方後円	不明
	天堤	肥後・八代郡竜北村野津・下北山王	蓋一	前方後円?	不明
大分	臼塚	豊後・臼杵市熊崎・臼塚神社	短甲二	前方後円	船形石棺二
	下山	豊後・臼杵市下山	短甲一	前方後円	家形石棺一
鳥取	石馬ヶ谷	伯耆・西伯郡淀江町福岡	馬一	前方後円	不明

表1　石製表飾品発見古墳一覧
（復元⑤　p9）

「石人・石馬」の分布は主に「筑後」と「肥後」の有明海沿岸地域である。

□「倭王讃・珍」は日本へ優れた石工技術をもたらした。
■「石人・石馬」の分布は「倭王権（倭の五王）」の勢力の広がりを示している。
■「石人・石馬」は肥後南部や豊後まで広がっている。
■「石人・石馬」の分布は「倭の五王」が「中部九州」まで征服していることを示している。

□「石人・石馬」は墓に設置されている。「倭王権」が派遣した武将の墓であろう。

第4章　倭王珍

1　倭王珍の朝貢

(1)「13人の将軍」

「426年」に倭王讃が死去して、「427年」に「倭王珍」が即位する。

太祖の元嘉二年（425年）、讃、又司馬曹達を遣わして表を奉り、方物を献ず。讃死して弟の珍立つ。使いを遣わして貢献し、自ら使持節・都督、倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍・倭国王と称し、表して除正せられんことを求む。詔して安東将軍倭国王に除す。珍、又倭隋等十三人を平西・征虜・冠軍・輔国将軍の号に除せんことを求む。詔して並びに聴（ゆる）す。　『宋書』

「倭王珍」は即位すると直ちに「宋」へ朝貢する。
この時「珍、又倭隋等十三人を平西・征虜・冠軍・輔国将軍の号に除せんことを求む。詔して並びに聴(ゆる)す。」とある。
「倭王珍」は即位すると直ちに「13人の将軍」を「宋」が認めるように請願している。

「13人の将軍」は「倭王讃」の時代に活躍していることがわかる。

(2) 「倭隋」と「平西将軍」

「13人の将軍」の中に「倭隋」が居る。名前があるのは「倭隋」だけである。「倭隋」は筆頭将軍であろう。最初に出てくる将軍名は「平西」である。「倭隋」は「平西将軍」に任命されたのであろう。

「平西」は「西を平定する」という意味であろう。「西」は「西日本」であろう。

□「倭隋」は「西日本」を平定した将軍であろう。

2 「倭隋」と江田船山古墳

(1) 「倭讃」と「倭隋」

「倭王讃」は『宋書』に「倭讃」と書かれている。「倭」は姓であり、「名前」は「讃」であろう。

「倭隋」も姓は「倭」であり、名前は「隋」であろう。

「倭王讃」「倭王珍」は「倭王」になっている。「倭」は「王族」の「姓」である。

「倭隋」も「倭」姓である。「倭隋」は「倭王讃」「倭王珍」と同族であろう。

○倭讃・珍と倭隋の系図

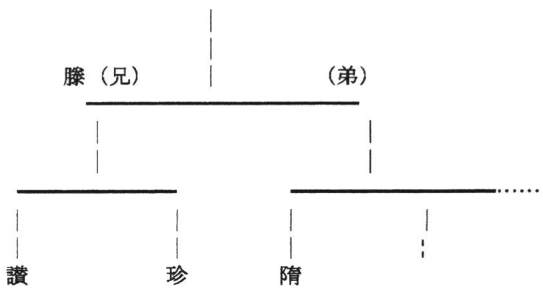


図6　倭讃・珍と倭隋の系図

そのため「倭隋」は筆頭将軍になっているのであろう。「倭王讃」「倭王珍」と「倭隋」は従兄弟であろう。（佃説）

図6　倭讃・珍と倭隋の系図

(2) 江田船山古墳

「江田船山古墳」は、熊本県玉名郡和水町大字江田にある。「前方後円墳」である。墳丘は3段築成で全長62m、

後円部径41ｍである。盾形の周堀をめぐらし、円筒埴輪を樹立する。

白石太一郎氏は『古墳の語る古代史』（岩波現代文庫）の中で次のように述べている。

副葬品に複数の冠・耳飾り・短甲などがみられることからも、被葬者は一人ではなく、複数であったことが想定される。すでに何人かの研究者が指摘しているように、それらの副葬遺物のなかには、金銅透彫冠帽、長型垂飾付耳飾、金銅帯金具、竜文鉄地金銅張鏡板付轡をともなう馬具、衝角付冑、横矧板鋲留短甲など五世紀後半と考えられる古相の遺物群と亀甲繋文広帯式金銅冠、短型垂飾付耳飾、亀甲繋文金銅飾履、横矧板皮綴短甲、鉄素環鏡板付轡や鉄輪鐙をともなう馬具など六世紀初め頃と考えられる新相の遺物群が見出せる。さらに宝珠形立飾付狭帯式金銅冠や垂飾をともなわない金環などは、さらに新しい最新相の遺物群として分類できる可能性が大きい。少なくとも埋葬の時期をそれぞれ異にする、金銅製の冠・冠帽をもった被葬者が三人いたことはまず確実といえよう。　白石太一郎氏（『古墳の語る古代史』（岩波現代文庫）　p180）（62号）

図７　江田船山古墳の副葬品

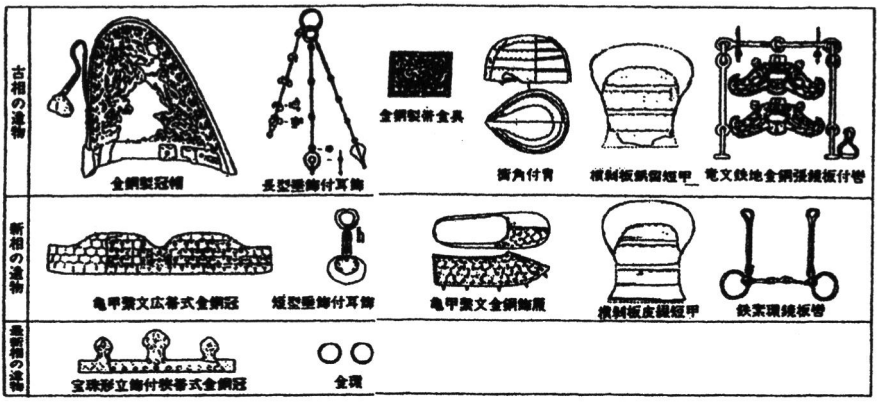


図７　江田船山古墳の副葬品にみられる三相

「江田船山古墳」は追葬が2回行われているという。3人が埋葬されている。

江田船山古墳の被葬者とその時期をまとめると次のようになる。

江田船山古墳の被葬者とその時期

○初葬（古相）……5世紀後半

■副葬品…金銅透彫冠帽、長型垂飾付耳飾、金銅帯金具、竜文鉄地金銅張鏡板付轡

○追葬（1回目）（新相）……5世紀末～6世紀初頭

■副葬品…亀甲繋文広帯式金銅冠、短型垂飾付耳飾、亀甲繋文金銅飾履、横矧板皮綴短甲、鉄素環鏡板付轡や鉄輪鐙をともなう馬具など

○追葬（2回目）（最新相）……6世紀後半

■副葬品…宝珠形立飾付狭帯式金銅冠、垂飾をともなわない金環など

「江田船山古墳」の主（初葬者）は「5世紀後半」に埋葬されている。

副葬品に「王冠」がある。「江田船山古墳」の主は「王」になっている。

「倭の五王」は「大王」である。「倭王」に仕えて「王位」に即いているのは「倭王」と同族であり、「筆頭将軍」に任命された「倭隋」であろう。

「江田船山古墳」は「倭隋」の墓であろう。

「倭王讃」は「426年」に死去しており、「倭王珍」は「442年」に死去している。「倭隋」は「倭王讃」「倭王珍」に仕えている。死去するのは「440年頃～450年頃」であろう。墓が作られるのは「5世紀後半」になる。「江田船山古墳」の時期と一致する。

□「江田船山古墳」は「倭隋」の墓であろう。

■「王冠」が出土している。

■「倭隋」は「王」になっている。「江田王」である。

3 「倭王讃」と「倭隋」の関係

(1) 妻入横口式家形石棺

「石人山古墳」の石棺は「妻入横口式家形石棺」である。石棺の蓋には見事な「直弧文」が彫られている。

図8 石人山古墳の直弧文

（復元⑤ p16）

「石人山古墳」の石材は熊本県の菊池川下流域から運ばれているという。『国立歴史民俗博物館研究報告』（第80集）所収の高木正文氏の「肥後における装飾古墳の展開」の中

で「(石人山古墳の) 石材は肥後の菊池川下流域から運ばれたもの (高木恭二氏教示)」とある。

「菊池川下流域」は「江田船山古墳群」のある「玉名郡」、およびその下流の「玉名市」である。石人山古墳の石棺は「江田船山古墳群」のある菊池川下流域から八女古墳群まで運ばれている。

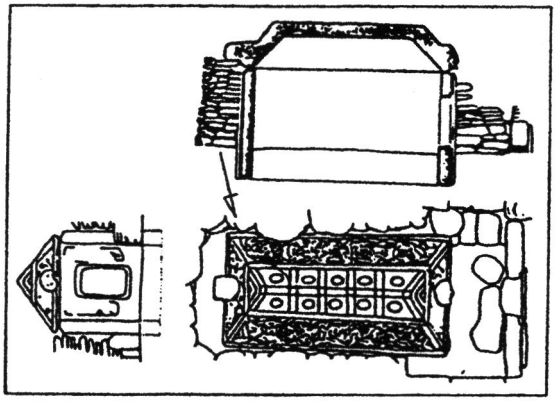


図8　石人山古墳の横口式家形石棺

(2) 江田船山古墳の石棺

「江田船山古墳」も「妻入横口式家形石棺」である。

図9　江田船山古墳の家形石棺

「横口式家形石棺」は有明海沿岸に多く分布している。

表2　横口式家形石棺の地名表

表２　九州横口式石棺（妻入）地名表

『探訪日本の古墳(西日本編)』(有斐閣選書R)

No.	古墳名	所在地	墳形	墳丘の規模	外覆施設	石棺の形態	出土遺物	備考
1	江田船山古墳	熊本県玉名郡菊水町江田	前方後円墳	全長60m(周濠の内側)	なし	家形石棺	鏡６面、刀、剣、槍、鉄鏃、玉類、冠、沓、帯金具、須恵器他	羨道付設
2	石之室古墳	熊本県下益城郡城南町塚原	円墳	現径約20m	〃	〃	須恵器坏片、銅環、鉄板、鉄鏃、円筒状石製品	羨道付設 棺身内側に線刻文様
3	塚原・36号方形周溝墓	〃	方形周溝墓	12.8×11.9m	〃	不明(家形石棺)	土師器（小形丸底壷、盌、高坏）	羨道付設
4	塚原・丸山８号墳	〃	円墳	径12.8m	〃	〃(〃)	なし	〃
5	塚原・丸山34号墳	〃	〃	径11.5m	〃	〃(〃)	〃	
6	西隈古墳	佐賀市金立町西隈	〃		横穴式石室	家形石棺		円筒埴輪・棺身・棺蓋に線刻文様
7	西原古墳	佐賀市久保泉						
8	石櫃山古墳	久留米市高良内町	前方後円墳		なし	家形石棺	管玉、蕨手刀子、刀子	円筒・形象埴輪
9	石人山古墳	福岡県八女郡広川町一条 人形町	〃	110m	横穴式石室	〃	不明	武装石人、棺身・棺蓋直弧文の浮彫
10	浦山古墳	久留米市上津町二軒茶屋	〃	60m	〃	〃	伝、刀、剣、勾玉、金環他	棺身に線刻文様

「横口式家形石棺」は「倭王権（倭の五王）」の石棺である。

「石人山古墳（倭王讃）」の「妻入横口式家形石棺」は「倭隋」が造り、江田から運んだのであろう。

「倭王讃」の石棺には素晴らしい「直弧文」を彫っている。自分の石棺にはそのようなものは彫っていない。自分が仕えた「王」に対しての礼儀であろう。

□「倭隋」は「倭王讃」のために石棺を造る。

■石棺は「妻入横口式家形石棺」であり、蓋には素晴らしい直弧文を彫っている。

■「倭隋」が石棺を江田から八女古墳群まで運んでいる。

■「倭隋」は「倭王讃」を如何に尊敬しているかがわかるであろう。

4　倭王珍による「西日本」の征服

(1)　「四国ルート」の開拓

高木恭二氏は「九州の刳抜式石棺について」（『古代文化』1994年5月号）の中で「九州から運ばれた石棺」について述べている。

畿内地方での長持形石棺の使用が終焉を迎えるのは5世紀後半頃で、恐らくそれに替わって登場したのが九州の舟形石棺であったろう。初めは北肥後Ⅰ型舟形石棺であったが、5世紀の末頃になってそれは中肥後型舟形石棺に取って替わる。　　高木恭二氏

図10　九州から運ばれた阿蘇石製石棺の分布
（復元⑤　p118）

図の左上に「菊池川下流域産石棺」とある。その上に「蓮華寺石棺」「観音寺丸山石棺」「唐櫃山石棺」がある。菊池川下流域から運ばれた石棺である。

図を見ると「菊池川下流域」からの「ルート」が描かれている。「蓮華寺石棺」「観音寺丸山石棺」はその「ルート」にある。

○香川県観音寺市の古墳

■青塚古墳　…　前方後円墳、竪穴式石室、舟形石棺、5世紀中葉

■丸山古墳　…　円墳、横穴式石室、舟形石棺、5世紀中葉

「北肥後Ⅰ型舟形石棺」が「5世紀中葉」頃に「菊池川下流域」から「四国」へ運ばれている。

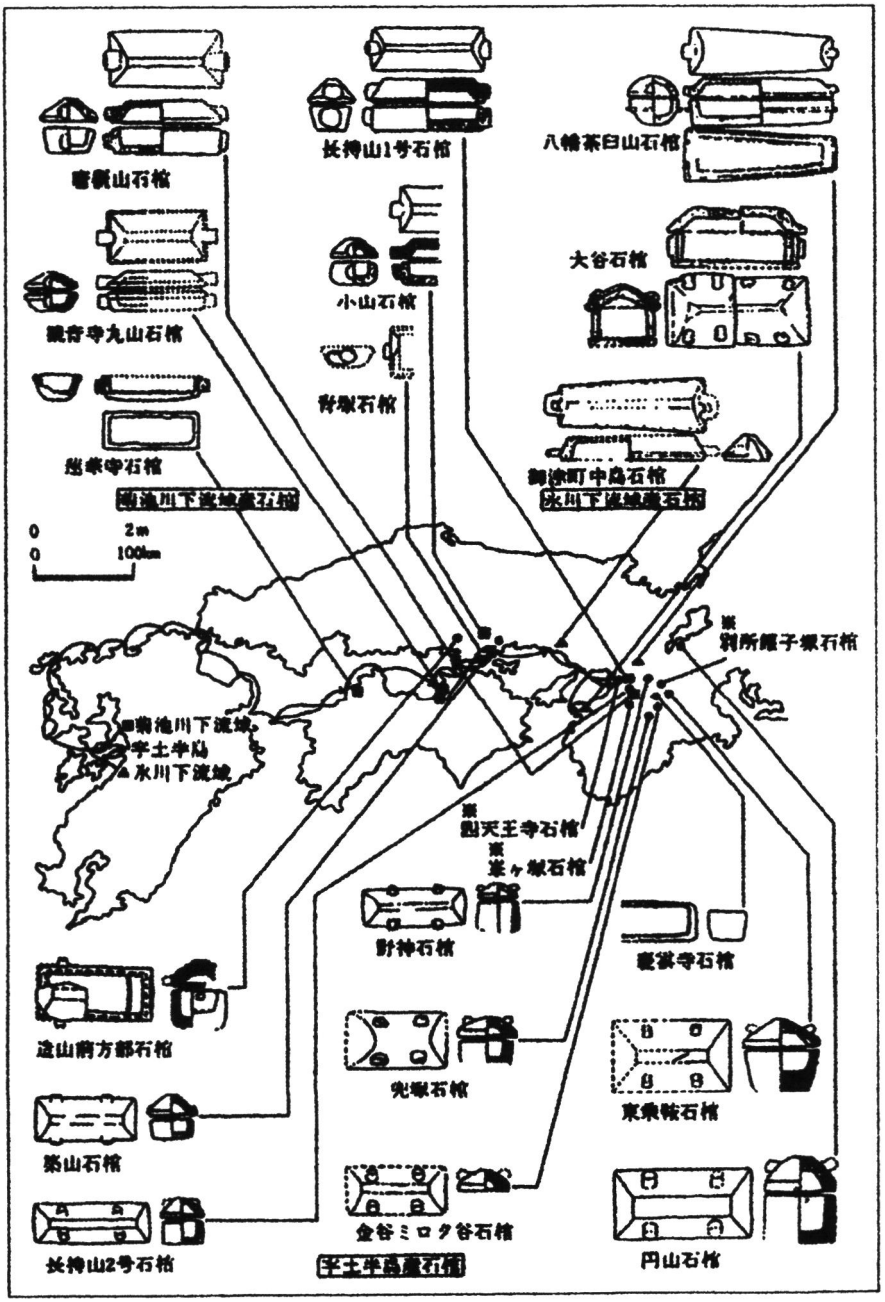


図10　九州外阿蘇石製石棺の分布（高木恭二1993年）

菊池川下流域から派遣された「武将」が死去するときに「舟形石棺」を故郷から取り寄せたのであろう。

これらの「武将」は菊池川下流域から「西日本」を征服するために派遣されている。

「倭隋」は「440年頃～450年頃」死去している（前述）。時期が一致する。この征服は「平西将軍」の「倭隋」が実行しているのであろう。

□「5世紀前半の後葉」頃から「西日本」の征服が始まる。

■「倭王珍（427年～442年）」の時代である。

■「平西将軍」の「倭隋」が実行しているのであろう。

■四国で死去した武将は「四国ルート」を守る役目であろう。

■死去するとき故郷の菊池川下流域から舟形石棺を運んでいる（5世紀中葉）。

5 「倭王珍」と「江田王二代目」

(1) 古市古墳群

「古市古墳群」についてホームページ『古市古墳群』は次のように説明している。

「古市古墳群」は大阪府の藤井寺市から羽曳野市の古市にかけて築かれている。合計123基の古墳からなり、その内訳は前方後円墳31基、円墳30基、方墳48基、墳形不明14基である。（中略）

まず4世紀末に津堂城山古墳が造られ、5世紀前半から中頃にかけて仲津山古墳、古室山古墳、誉田山古墳、古市墓山古墳、市野山古墳がほぼこの順で造られたとされている。　ホームページ『古市古墳群』

（注）「誉田山古墳」は「誉田御廟山古墳（現応神陵）」である。低地に造られている。ところが『古事記』は「応神天皇陵は丘の上にある」と記す。「丘の上」にあるのは「仲津山古墳」である（71号）。

図11　古市古墳群
（69号　p122）

□「古市王権（古市古墳群）」とは

■「4世紀後半」に「津堂城山古墳」の主が「古市」に渡来して樹立した「王権」である。

■「4世紀末」に「津堂城山古墳」が造られる。

■その後、「仲津山古墳」→「古室山古墳」→「誉田山古墳（現応神陵）」→「墓山古墳」が造られる。

(2) 市野山古墳

次に築かれるのは「市野山古墳」である。

図11　古市古墳群の古墳分布

古市古墳群の勢力は、古墳時代中期を中心に百数十年間にわたって、百舌鳥古墳群の勢力とともに機内政権の中枢を担った。

「市野山古墳」には「陪塚」がある。（図11）

○市野山古墳（大阪府藤井寺市）の陪塚

■唐櫃山（からとやま）古墳

■長持山古墳

「北肥後Ⅰ型舟形石棺」が出土している。

「市野山古墳」は「5世紀中葉～後葉」の古墳である。「陪塚」があるから「王」の墓であろう。「江田王の二代目」の墓であろう。

□「江田王の二代目」も「将軍」であり、四国から大阪（古市古墳群）まで征服している。

■「倭王珍」の時代である。

■「江田王の二代目」が「平西将軍」を引き継いでいるのであろう。

□「倭王珍」は「四国ルート」を開拓して、大阪府藤井寺市まで征服している。

6 「倭王珍」の墓

(1) 市野山古墳と墓山古墳

市野山古墳は「江田王二代目」の墓である。

ところが「古市王権」の「墓山古墳」と同じ設計で造られている。

「江田王二代目」は古市王権を征伐した時、「墓山古墳」を造った工人に自分の墓を造らせているのであろう（71号）。

(2) 「倭王珍」の墓

大阪府茨木市にある「太田茶臼山古墳（伝継体天皇陵）」は「市野山古墳」と同形・同大であるという（71号）。

「太田茶臼山古墳」は「5世紀中葉」頃の古墳である。素晴らしい周濠がある。「市野山古墳」よりも上位の人物の墓であろう。

「5世紀中葉」頃に墓を造っている。「倭王珍」の在位は「427年～442年」である。墓は「5世紀中葉」頃に造られる。

「太田茶臼山古墳」は「倭王珍」の墓であろう。「江田王二代目」が「墓山古墳」を造った工人に造らせているのであろう（76号）。

□「倭王珍」の墓は「太田茶臼山古墳」である。

■「倭王珍」は「西日本」を征服した偉大な「王」で

ある。

■「西日本」を征服する目標を掲げ、実行している。

■「四国ルート」を開拓し、大阪府茨木市、藤井寺市まで征服している。

■倭王武の上表文にあるように「祖禰躬（みずか）ら甲冑をつらぬき、山川を跋渉し、寧処（安心して生活する）に遑（いとま＝ゆとり）あらず」を実行している。

■さらに「朝鮮半島」まで支配している。（前述の上表文（「六国諸軍事」を自称している））

第5章　倭王済

1　朝鮮半島の支配(1)

(1)「倭王済」による朝鮮半島の支配

「倭王済」は「443年」に即位する。直ちに「宋」へ朝貢する。

「9」（③）二十年（文帝、元嘉二十年＝443年）、倭国済、使を遣わして奉献す。復た以て安東将軍倭国王と為す。

「10」（d）（文帝、元嘉二十年、443年）是の歳、河西国・高麗国・百済国・倭国、並びに使を遣わして方物を献ず。《済》

「11」（④）（文帝、元嘉二十八年＝451年）使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東将軍は故の如く、并びに上（たてまつ）る所の二十三人を軍郡に除す。《済》

「443年」の最初の朝貢では「安東将軍倭国王と為す」であった。

ところが「451年」の朝貢では「使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東将軍倭国王」になっている。

「倭王済」は「443年～451年」の間に「新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓」を支配していることを「宋王朝」が認めている。

(2)「倭王珍」の朝鮮半島支配

「倭王珍」は朝鮮半島を支配している。

太祖の元嘉二年（425年）、讃、又司馬曹達を遣わして表を奉り、方物を献ず。讃死して弟の珍立つ。使

いを遣わして貢献し、自ら使持節・都督、倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍・倭国王と称し、表して除正せられんことを求む。詔して安東将軍倭国王に除す。珍、又倭隋等十三人を平西・征虜・冠軍・輔国将軍の号に除せんことを求む。詔して並びに聴（ゆる）す。

『宋書』

「倭王珍」は「４２７年」に朝貢し、「自ら使持節・都督、倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍・倭国王と称し」とある。「朝鮮半島」を支配していることがわかる。

ところが「宋王朝」はそれを認めず、認めたのは「安東将軍倭国王」だけである。

□「倭王珍」は朝鮮半島を支配している。

■在位は「４２７年～４４２年」である。

■この間に朝鮮半島まで支配している。

しかし「宋王朝」は朝鮮半島を支配していることを認めていない。認めたのは「４５１年」の「倭王済」の朝貢の時である。

(3) 「高句麗好太王」碑の「倭国」について

「倭王珍」は「四国ルート」を開拓して、「西日本」を征服する。

「倭王珍」には「朝鮮半島」まで征服する余裕はないはずである。

「倭讃・珍」は「３９０年」頃、倭城から筑後の広川町に渡来している。「貴国」の全盛時代である。その「貴国」は「４０７年」の「高句麗」との戦いで壊滅的な打撃を受ける。それを見て、「倭讃・珍」は「貴国」を攻め、「貴国」最後の仁徳天皇を追い出す。「貴国」の地は「倭国」の領土になる。「貴国」の人々はそのまま住んでいる人も多いであろう。「倭国」は「貴国」の上に君臨した「王権」と言える。

「高句麗好太王」は「４１２年」に死去する。丁度、「倭讃」が「倭国」を樹立して「倭王讃」になった時である。

「高句麗好太王碑」には「３９１年」に「倭国は百残、□□新羅を破り、以て臣民と為す」とある（55号）。

永楽五年（３９５年）、（中略）百残（百済）と新羅は旧（もと）是れ（高句麗の）属民、由来朝貢す。而して倭は辛卯年（３９１年）を以て来り、海を渡り百残、□□新羅を破り、以て臣民と為す。以て六年（３９６年）、王は躬（みずか）ら水軍を率い残国（百済）を討伐す。

「好太王碑」

「倭国」とあるが、「倭国」ではなく「貴国」である。

「３９０年」に「倭讚・珍」が渡来して翌年の「３９１年」に朝鮮半島まで征服することはできないであろう。

「高句麗好太王」は「４１２年」に死去し、「好太王碑」が建てられるのは「４１４年」である。この間に「倭国」は「貴国」の上に君臨して王権を樹立する。「貴国」があったところは「倭国」になる。

そこで高句麗は「貴国」は「倭国」と同じであるとして、「３９１年」の「貴国が海を渡り百残、□□新羅を破り、以て臣民と為す」を「倭国」としたのであろう。「好太王碑」はすべて「倭国」になっている。

したがって「倭王珍」は「朝鮮半島」を征服したのではなく、「貴国」が征服し、支配していた「朝鮮半島」を引き継いだだけと考えられる。

「自ら使持節・都督、倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍」を自称したのは「支配」していることを「宋王朝」に認めさせようとしているのであろう。

□「倭王珍」は「自ら使持節・都督、倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍」を自称する。

■しかし「征服」したのではない。

■「貴国」が征服して「支配」していたのを引き継いでいるだけである。

２　朝鮮半島の支配(2)

(1)「任那日本府」の存在

「４６４年」に「任那日本府」は存在している。

（雄略）八年（４６４年）、新羅王、人を任那王のもとに使わし曰く、「高麗王、我が国を征伐す。（中略）伏して救いを日本府の行軍元帥等に請う」という。

『日本書紀』

「新羅王」は「任那王」に対して「救いを日本府の行軍元帥等に請う」と述べている。「日本府」は「任那」にあることがわかる。「任那日本府」である。

「４６４年」は「倭王興」の時代である。「倭王興」は「４６２年」に即位している。

したがって「任那日本府」を設置したのは「倭王済」であろう。

□「倭王済」は「任那日本府」を設置している。

(2)「任那日本府」と「任那諸国」

「任那日本府」について次の記述がある。

（欽明）五年（５４４年）三月、百済、奈率阿乇得文・

許勢奈率奇麻・物部奈率奇非等を遣わして上表して曰く、「（中略）早く任那を建てるために日本府と任那とを召す。（中略）久しくしても来ず。（中略）
それ任那は安羅を以って兄と為し、唯その意に従う。
安羅人は日本府を以って天と為し、唯その意に従う。
『日本書紀』

「任那諸国」は「安羅国」を「兄」としている。その「安羅人」は「任那日本府」を「天」として「唯その意に従う」とある。「絶対服従」である。

「任那諸国」とは次の「10国」である。

（欽明）二十三年（562年）正月、新羅は任那の官家（みやけ）を打ち滅ぼす。（一本に云う、二十一年、任那は滅ぶ。総じては任那と言う。別では加羅国・安羅国・斯二岐国・多羅国・卒麻国・古嵯国・子他国・散半下国・乞飡国・稔禮国と言う。合わせて十国なり。）
『日本書紀』

□「任那日本府」は「任那諸国」を支配している。
■「倭王済」は「任那日本府」を設置して「任那諸国」を完全に支配している。

(3) 「任那日本府」の設置と承認

「倭王珍」は「自ら使持節・都督、倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍」を自称している。しかし「宋王朝」はそれを認めていない。

「倭王済」は「任那日本府」を設置した。すると「宋王朝」は「倭王済」を「使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東将軍は故の如く」と認めている。

古代中国（漢代）では「府を開く」ことができるのは「承相・大司馬・御央太夫」の三公だけであった。後には将軍でも「府を開く」ことができるようになる。

「倭王済」は「任那日本府」を設置している。「府を開いた」のである。

それによって「宋王朝」は「朝鮮半島」を支配していることを認めたのであろう。

(4) 「六国諸軍事」と「百済」

「倭王珍」の「六国諸軍事」は「倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓」である。

「倭王済」の「六国諸軍事」は「倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓」である。

「倭王珍」の「六国諸軍事」には「百済」が入っている。ところが「倭王済」の「六国諸軍事」には「百済」が無く、代わりに「加羅」が入っている。

ところが「加羅」は「任那諸国」の国であり、「任那」の中に含まれている。「倭王済」の「六国諸軍事」は矛盾している。

これについては次のように解釈している。

「百済」は「倭王権」よりも先に「宋王朝」から「将軍号」を賜っている。

○百済国の将軍号

■義熙十二年（416年）、百済王餘映を以て使持節都督百済諸軍事鎮東将軍百済王と為す。『宋書』

■高祖（武帝）は即位すると（420年）、餘映の号を鎮東大将軍に進める。『宋書』

「百済」は「416年」に「鎮東将軍」になり、「420年」には「鎮東大将軍」になっている。

「倭王済」が「六国諸軍事」を認められるのは「451年」である。「宋王朝」はすでに「百済」に「将軍号」を与えている。そのため「倭王済」が「百済」を支配していることを認めなかったのであろう。

その代わりに「数」を合わせるために「百済」の替わりに「加羅国」を付けたのであろう。

□倭王権（倭の五王）による「朝鮮半島」の支配（まとめ）

■「朝鮮半島」は「貴国」が征服して支配していた。

■「倭国」は「貴国」の上に君臨して樹立した王権である。

■「倭王珍」は朝鮮半島へ進出して征服したのではなく「支配」を引き継いでいる。

■そのため「宋王朝」は「倭王珍」が「朝鮮半島」を軍事的に支配していることを認めなかったのであろう。

■「倭王済」は任那に「任那日本府」を設置して「朝鮮半島」を支配する。「任那諸国」は「倭国」を「天」として「その意に従う」という。

■これにより「宋王朝」は「倭王済」が朝鮮半島を支配していることを認めたのである。

3　近畿地方の征服

(1)　近畿地方の「阿蘇ピンク石製石棺」

「5世紀の末頃」になると近畿地方の石棺はピンク石製の舟形石棺に代わる。

五世紀代における近畿地方の有力古墳は河内平野に集中しており、おそらくここでも五世紀後半になると竜山石製長持形石棺は使われませんが、この竜山石に代わって五世紀後半から河内地方では九州の菊池川付近

で造られた阿蘇石製舟形石棺が入るようになります。そして河内では五世紀末から六世紀初頭にピンク石製の舟形石棺が持ち込まれますが、この段階では菊池川産の石棺はもう入っていません。

高木恭二氏「阿蘇石製石棺の分布とその意義」
（『継体大王と越の国』（福井新聞社））

河内（近畿地方）では「五世紀末」になると、菊池川流域の舟形石棺に代わって「阿蘇ピンク石製舟形石棺」が入ってくるという。

阿蘇ピンク石製舟形石棺は「熊本県宇土市」付近で造られた石棺である。

「この段階では菊池川産の石棺はもう入っていません」とある。菊池川流域の人々に代わって宇土市付近の人々が近畿地方へ派遣されていることがわかる。近畿地方の「ピンク石製石棺」は「宇土市付近」から派遣された武将の墓であろう。

その時期は「五世紀末から六世紀初頭」であるという。

表3　九州外阿蘇石製石棺の変遷
（『継体大王と越の国』（福井新聞社）より）
（62号）

(2) 「ピンク石製石棺」の始まり

「表3」を見ると、「ピンク石製石棺」が最初に埋納されているのは「備前」であり、「480年」頃である。

「5世紀後半」頃から「ピンク石製石棺」が出現している。

□「阿蘇ピンク石製石棺」の出現は「5世紀後半」頃からである。

■「阿蘇ピンク石製石棺」は「備前」から始まっている。

(3) 「倭王興」と「備前」の征服

「倭王興」の在位は「462年～477年」である。

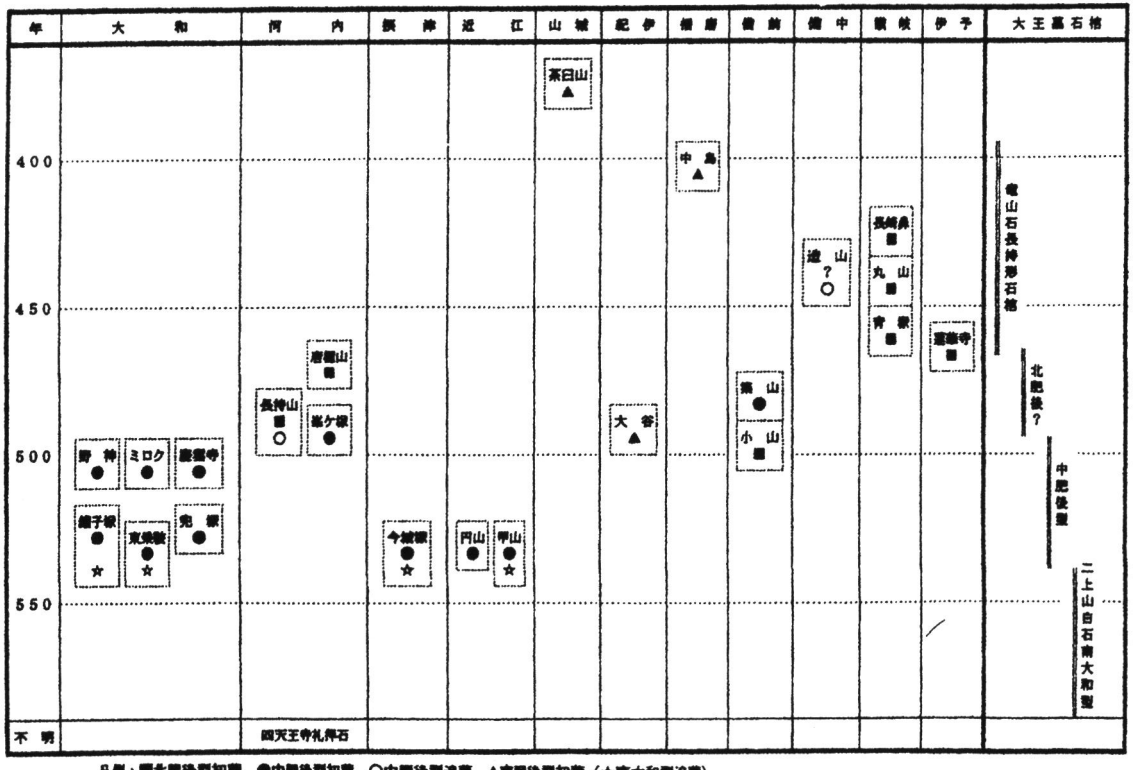
「倭王興」は即位すると直ちに「吉備」を征服する。

（雄略）七年（463年）、吉備下道臣前津屋は、小女を以って天皇の人とし、大女を以って己の人とし、相闘わし、もし、小女が勝つと殺したという。また、小鶏を以って天皇の鶏とし、毛を抜き羽を切り、大雄鶏を以って己の鶏とし、闘わせて、小鶏が勝てば刀を抜いて殺したという。これを聞いた天皇は、物部の兵士三十人を派遣して、前津屋および族七十人を誅殺したという。

『日本書紀』

「480年」頃、「備前」に「阿蘇ピンク石製石棺」が最初に埋納される。「備前」を征服してそこを守るために駐留した武将の墓であろう。

表３　九州外阿蘇石製石棺変遷図（高木恭二1998年を改変）



凡例：■北肥後型初葬　●中肥後型初葬　○中肥後型追葬　▲南肥後型初葬（☆南大和型追葬）
石棺分類は、和田晴吾1976年「畿内の家形石棺」、高木恭二1994年「九州の刳抜式石棺について」を参照。
長持形石棺・南大和型家形石棺は、九州産ではない。

□「5世紀後半」頃から「九州外舟形石棺」は「菊池川下流域」から「宇土地方」に代わっている。

■「この段階では菊池川産の石棺はもう入っていません」とある。

■「倭王興」の時から武将は「菊池川下流域」から「宇土地方」に交代している。

4 「ワカタケル」と「江田王」

(1) 倭王済と「ワカタケル」

「倭王済」の在位は「443年～461年」である。世継ぎは「倭王興」であり、その弟が「倭王武」である。

「倭王武」は「478年」に即位して死去するのは「525年」である（後述）。「48年」間も在位している。

「倭王武」は「倭王済」の子であるから「461年」以前に生まれている。

「倭王武」は「525年―461年＝64年」以上の長寿である。当時の平均寿命を大きく超えている。

「倭王武」は「倭王済」が死去する直前頃に生まれているのであろう。

(2) 江田船山古墳出土の鉄刀銘

江田船山古墳は筆頭将軍の「倭隋」の墓である。「倭隋」は「西日本」を征服している。

江田船山古墳の「追葬1」に鉄刀があり、嶺（みね）に銀象嵌で銘が刻まれている。

○銀象嵌鉄刀の銘文

治天下獲□□□鹵大王世、奉事典曹人名无□弖、八月中、用大鉄釜并四尺廷刀、八十練、□十振、三寸上好□刀、服此刀者、長寿、子孫洋々、得□恩也、不失其所統、作刀者名伊太□、書者張安也

（訳）治天下獲□□□鹵大王の世、奉事する典曹人、名は无利弖。八月中、大鋳釜を用いて四尺廷刀を八十練、三寸の上好□を六十練するなり。此の刀を服する者は長寿、子孫は三恩を得るなり。其の統ぶる所を失わず。作刀者、名は伊太加、書者は張安也

（注）□……読み取れない文字。（訳文）には一部の文字を読める文字として入れてある。

「治天下獲加多支鹵大王世、奉事典曹人名无利弖」とある。「典曹人」は「文官」である。「倭隋」は「武官」であったが「追葬1」の「无利弖」は「文官」になっている。

「追葬1」の年代は「5世紀末～6世紀初頭」である。「无

利弓」はその「15年前～20年前」頃に活躍している。
丁度「ピンク石製石棺」が出現する時期である。

□「倭王権（倭の五王）」の武官は「江田王」から「宇土王」に交代している。
■その時期は「5世紀後半」である。
■「獲加多支鹵（ワカタケル）」が生まれたころである。

(3) 「獲加多支鹵大王」と「无利弓」

「倭王武」は「倭王済」が死去する直前「460年」頃生まれている。

「倭王済」はそろそろ死期が近づいていることを認識する。「ワカタケル」は生まれたばかりである。自分は征服活動のために近畿地方に来ている。「ワカタケル」を育てることができない。

そこで最も信頼できる「同族」の「倭隋」の子孫に養育を任せることにしたのであろう。

そのために「倭隋」の子孫を「武官」から「文官」にして「倭王権（倭の五王）」の本拠地に招いたのであろう。それが「无利弓」である。

この時「宇土王」は「武官（将軍）」になり、近畿地方へ派遣された。

5 倭王済の墓

(1) 近畿地方の大型前方後円墳の消滅

「図12」を見ると畿内における前方後円墳は「河内」の「岡ミサンザイ古墳」を最後に築かれなくなる（71号）。

図12 近畿中央部における大型古墳の編年
（白石太一郎著『考古学と古代史の間』（筑摩書房） p112～113）
（71号 p64、65）

「岡ミサンザイ古墳」は「古市古墳群」にある（図11）。

(2) 岡ミサンザイ古墳

「岡ミサンザイ古墳」は次のような古墳である。

○岡ミサンザイ古墳
・前方後円墳 墳丘長…242m、後円部径…148m、高さ…19・5m、前方部幅…182m、高さ…16m
・三段築成の墳丘 くびれ部には東側に「造り出し」
・埴輪 円筒埴輪（窖窯で焼かれたもの）
形象埴輪（家、蓋（きぬがさ）、盾、人物など）
・埋葬施設 不明
・築造時期 5世紀末～6世紀初

ホームページ『岡ミサンザイ古墳』

「古市古墳群」は「江田王二代目」が征服している。「市野山古墳」は「江田王二代目」の墓である。

「岡ミサンザイ古墳」は「市野山古墳」の後に造られている。しかも「市野山古墳」と同じ「Ⅲ型」前方後円墳である（76号）。「倭王権」の墓である。

「市野山古墳」の全長は「２３０ｍ」であるのに対して「岡ミサンザイ古墳」の全長は「２４２ｍ」もある。「岡ミサンザイ古墳」は「江田王二代目」の古墳よりも大きい。「倭王権」の「王墓」であろう（71号）。

築造時期は「５世紀末～６世紀初め」であるという。「倭王済」の在位は「４４３年～４６１年」であり、「倭王興」の在位は「４６２年～４７７年」である。

ところがもう一つのホームページ「Wikipedia」の『岡ミサンザイ古墳』では築造年代は「５世紀後半」になっている。

□「倭王済」の墓は「岡ミサンザイ古墳」であろう。

■「江田王二代目」が征服した「古市古墳群」に造られている。

■しかも「江田王二代目」の古墳よりも大きい。

■立派な周濠もある。

■「倭王権」の「王墓」である。

第６章　倭王興

１　「倭王興」の征服

(1)　「倭王興」と「雄略紀」

「倭王興」の在位は「４６２年～４７７年」である。「４６２年」に即位すると直ちに「宋」へ朝貢する。「宋王朝」は「倭王興」を「安東将軍」に任命する。

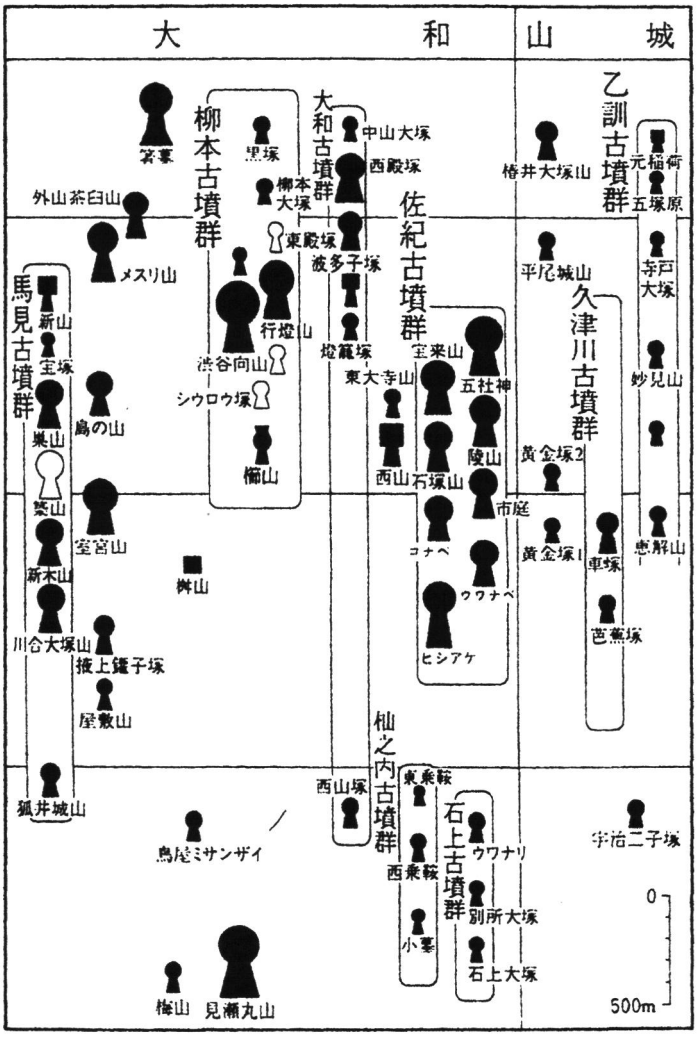
（大明）六年（４６２年）三月壬寅、倭国王の世子、興を以て安東将軍と為す。　『宋書』

翌月に「宋」は「倭王興」に「安東将軍」に任命したことを伝える。

（雄略）六年（４６２年）四月、呉国、使を遣わして貢献する。　『日本書紀』

(2)　「中国地方ルート」の開拓

「倭王興」は「４６２年」に即位すると、翌「４６３年」


大和
山城
乙訓古墳群
椿井大塚山
元稲荷
五塚原
寺戸大塚
妙見山
恵解山
久津川古墳群
車塚
芭蕉塚
平尾城山
黄金塚2
黄金塚1
市庭
陵山
五社神
宝来山
佐紀古墳群
石塚山
コナベ
ウワナベ
ヒシアケ
東大寺山
西山
中山大塚
西殿塚
大和古墳群
波多子塚
燈籠塚
東殿塚
柳本大塚
黒塚
柳本古墳群
行燈山
渋谷向山
シウロウ塚
櫛山
箸墓
外山茶臼山
メスリ山
馬見古墳群
新山
宝塚
巣山
鍋山
室宮山
新木山
川合大塚山
掖上鑵子塚
屋敷山
狐井城山
鳥の山
桧山
鳥屋ミサンザイ
梅山
見瀬丸山
山之内古墳群
東乗鞍
西乗鞍
西山塚
石上古墳群
ウワナリ
別所大塚
石上大塚
小墓
宇治二子塚
0
500m

おける大型古墳の編年

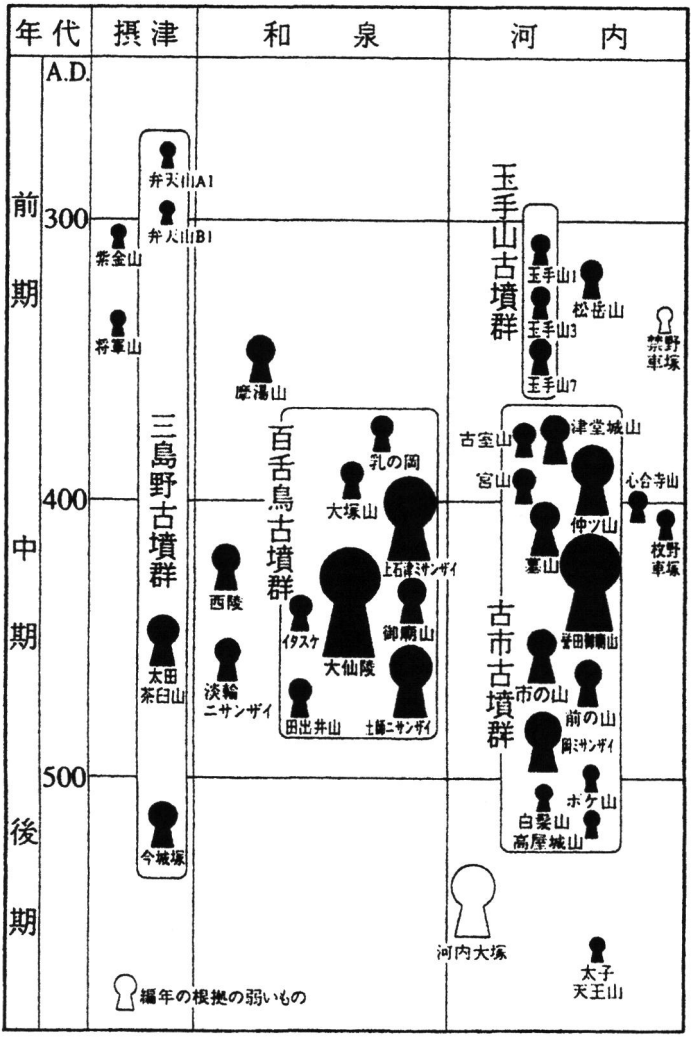

年代
摂津
和泉
河内
A.D.
前期
中期
後期
300
400
500
弁天山A1
弁天山B1
紫金山
将軍山
三島野古墳群
太田茶臼山
今城塚
摩湯山
百舌鳥古墳群
乳の岡
大塚山
上石津ミサンザイ
西陵
イタスケ
御廟山
大仙陵
淡輪ニサンザイ
田出井山
土師ニサンザイ
玉手山古墳群
玉手山1
玉手山3
玉手山7
松岳山
禁野車塚
古室山
津堂城山
宮山
心合寺山
仲ツ山
墓山
枚野車塚
誉田御廟山
古市古墳群
市の山
前の山
岡ミサンザイ
ホケ山
白髪山
高屋城山
河内大塚
太子天王山
編年の根拠の弱いもの

図12　近畿中央部に

に吉備を征服する（前述）。

さらに瀬戸内海の「中国地方」を征服する。これにより「中国地方ルート」ができる。

「倭王権」は大軍を派遣することが可能になる。

□「463年」に「四国ルート」から「中国地方ルート」に代わる。

■これにより大軍を派遣することが可能になる。

■「461年」に「倭王済」は死去する。

■その直前に「倭王済」は「宇土王」に「近畿地方」の征服を命じている。

■「倭王興」は父「倭王済」の意思を継いで「近畿地方」、およびその以遠の征伐を始める。

■「倭王興」はそのために「中国地方ルート」を開拓したのであろう。

2　日本海沿岸地域の征服

(1)「倭王興」と「日本海沿岸地域」

「463年」に「倭王興」は吉備を征服して「中国地方ルート」を開拓する。

「473年」には「倭王興」は「近畿地方」から「日本海沿岸地域」まで支配している。

（雄略）十七年（473年）三月、土師連等に詔して、「朝夕の御膳盛る清器を進（たてまつ）らしめよ」と言う。是に土師連の祖吾笥（あけ）、乃ち摂津国の来狭狭村、山背国の内村・附見村、伊勢国の藤形村、及び丹波・但馬・因幡の私の民部を進（たてまつ）る。名付けて贄（にえ）土師部と曰う。　『日本書紀』

「倭王興」は摂津国・山背国・伊勢国・丹波・但馬・因幡を支配している。

□「473年」までに、「倭王興」は「日本海沿岸地域」を征服する。

3　「倭王興」と近畿地方の征服

(1)「倭王興」による近畿地方の征服

河内（近畿地方）では「五世紀末」になると、菊池川流域の舟形石棺に代わって「阿蘇ピンク石製舟形石棺」が入ってくるという。

（図10）を見ると最下段の中央に「宇土半島産石棺」があり、その上に「金谷ミロク谷石棺（桜井市）」「兜塚石棺（桜井市）」「野神石棺（奈良市）」がある。

表4　宇土半島産の阿蘇石製石棺の分布
（62号　p84）

「表4」は「宇土王」が派遣した「武将」の墓であろう。「5世紀末頃」の墓である。

「宇土」から派遣された武将が「近畿地方」を征服している。「倭王興」の時代である。

□「倭王興」は「中国地方ルート」を開拓すると「近畿地方」を征服し、「日本海沿岸」地域まで征服している。

(2)　今城塚古墳

「今城塚古墳」は「継体天皇」の古墳であるといわれている。

○今城塚古墳　（大阪府高槻市郡家新町）（高槻市ホームページ）

■古墳時代後期

■淀川流域では最大級の前方後円墳

■墳丘の周囲には二重の濠がめぐり、総長約350m、総幅約360m

■日本最大の家形埴輪や精緻な武人埴輪が発見されている。

表4　宇土半島産の阿蘇石製石棺（今城塚石棺をその後追加）

No.	古墳・石棺名	所在地	墳形・規模	埋置施設	石棺形式
7	造山古墳前方部	岡山市新庄下	前方後円墳360	不明	舟形石棺
8	築山古墳	岡山県邑久郡長船町	前方後円墳90	竪穴式石槨	舟形石棺
9	長持山2号石棺	大阪府藤井寺市沢田	円墳20	竪穴式石槨	舟形石棺
10	峯ケ塚古墳	大阪府羽曳野市軽里	前方後円墳98	竪穴式石槨	舟形石棺？
11	今城塚古墳	大阪府高槻市郡家新町	前方後円墳190	横穴式石室？	家形石棺
12	野神古墳	奈良市京終町	前方後円墳	竪穴式石槨	舟形石棺
13	別所鑵子塚古墳	奈良県天理市別所町	前方後円墳47	竪穴式石槨	舟形石棺
14	東乗鞍古墳	奈良県天理市乙木町	前方後円墳72	横穴式石室	家形石棺
15	金屋ミロク谷	奈良県桜井市金屋	不明	不明	舟形石棺
16	兜塚古墳	奈良県桜井市浅古	前方後円墳50	竪穴式石槨	舟形石棺
17	慶雲寺石棺	奈良県桜井市大三輪町	不明	不明	舟形石棺
18	円山古墳	滋賀県野洲郡野洲町	前方後円墳37	横穴式石室	家形石棺
19	甲山古墳	滋賀県野洲郡野洲町	円墳	横穴式石室	家形石棺
20	四天王寺礼拝石	大阪市天王寺区	不明	不明	転用材？

「古墳時代後期」は「6世紀前半」頃と言われている。

「継体天皇」には崩年干支がある。

（継体）天皇の御年、肆拾参歳。丁未年四月九日に崩ず。

『古事記』

「丁未年」は「527年」である。「継体天皇」は「527年4月9日」に「43才」で死去している。

継体天皇が生まれるのは「484年」である。生涯は「484年～527年」である。

○継体天皇

■「484年」に生まれる

■「527年」に崩御

■「43歳」で死去

○「今城塚古墳」は「6世紀前半」の古墳といわれている。したがって「継体天皇」の墓と言えるであろう。

ところが「今城塚古墳」からは「阿蘇ピンク石製石棺」の破片が出土している。

「今城塚古墳」は「宇土市」出身の「王」の墓である。

(3) 「今城塚古墳」の主

「継体天皇の父」は「福井県坂井郡三国町」の振媛を妃として「継体天皇」を生む。

（継体）天皇の父は振媛が美人であると聞いて、近江国高嶋郡三尾の別業（別邸）から使いを遣わして三国の坂中井に聘（むか）えて妃と為す。遂に（継体）天皇を生む。

『日本書紀』

「継体天皇」は「近江国高嶋郡三尾」で生まれている。

「今城塚古墳」からは「宇土のピンク石片」と「二上山白石片」「竜山石片」が採集されている。「宇土のピンク石製石棺」が最初に納められたという。

「今城塚古墳」の主は「熊本県宇土」から「ピンク石製石棺」を取り寄せている。「今城塚古墳」は「熊本県宇土」の出身者の墓である。したがって「今城塚古墳」は継体天皇の墓ではない。

(4) 継体天皇の祖父

「継体天皇」は「484年」に生まれている。

この時の「継体天皇の父」の年齢を「25歳」前後としよう。生まれるのは「460年」頃になる。

「460年」頃、「倭王済」は「宇土王」に「近畿地方」の征伐を命じている。「継体天皇の父」は生まれたころで

ある。

したがって「宇土王」は「継体天皇の祖父」であろう。

□「宇土王」は「継体天皇の祖父」である。

■「宇土王」に任命された「460年」頃は「30才」くらいであろう。

■「50才」で死去したとすると「480年」頃に死去している。

■「480年」頃、「継体天皇の父」が後を引き継いでいるのであろう。

■「継体天皇の父」が活躍するのは「480年～500年」頃となる。

■「500年」以降に「継体天皇の父」が死去して「今城塚古墳」が造られたのであろう。

■宇土から「阿蘇ピンク石製石棺」が運ばれる。

■したがって「継体天皇」は父の「今城塚古墳」に追葬されたのであろう。

■「継体天皇」の石棺は「二上山白石」か、「竜山石」であろう。

□今城塚古墳は継体天皇の父の古墳である。

4 「倭王興」による「関東」の征服

(1) 群馬県の古墳群

群馬県（上毛野＝かみつけの）には多くの古墳群がある（図13）。

これらの古墳群を次のように呼ぶことにする。

○「図13」の古墳群のグループ名

■Aグループ …… 高崎市の「浅間山古墳」を中心にした古墳群

■Bグループ …… 太田市の「太田天神山古墳」を中心にした古墳群

（古市王権　古市王権が滅んだとき関東まで逃げてきたのであろう）

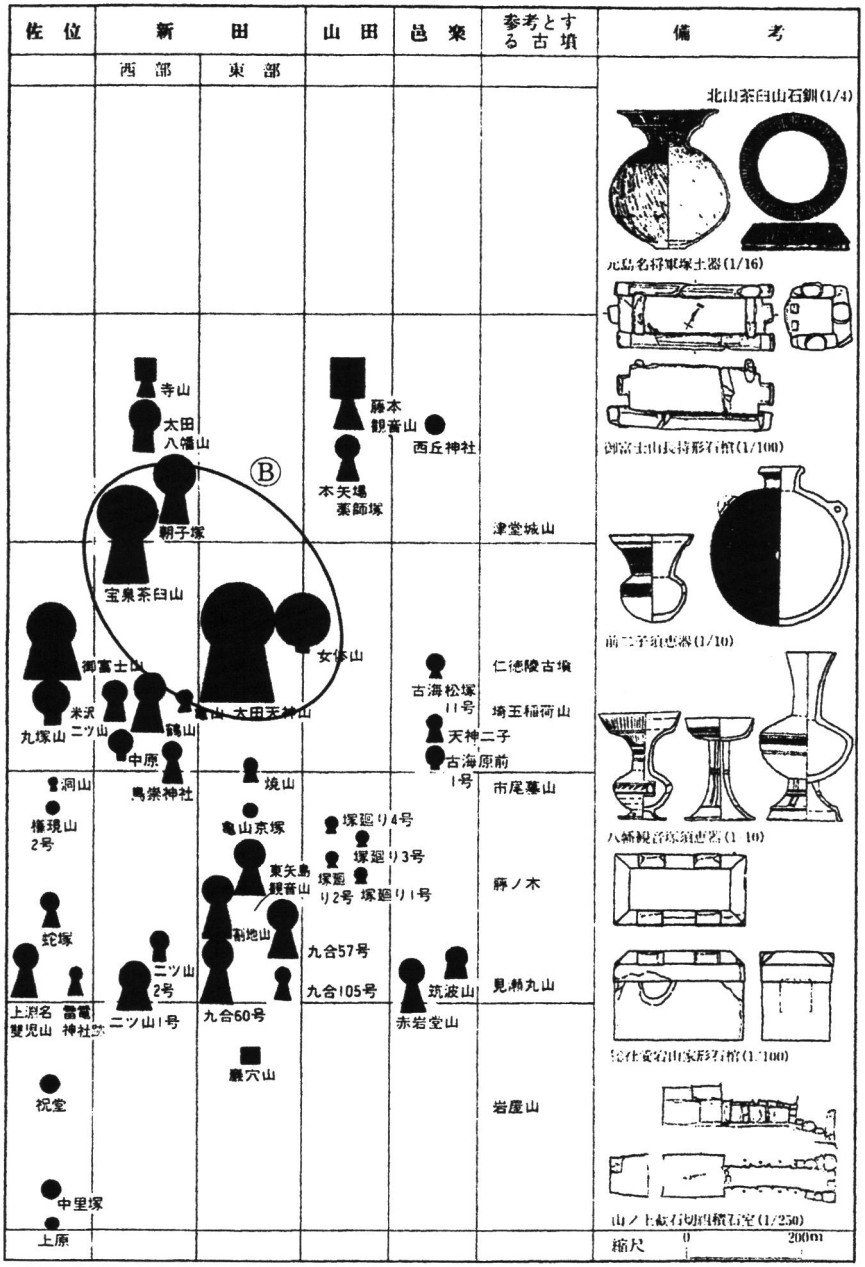
■Cグループ …… 高崎市の「不動山古墳」を中心にした古墳群

■Dグループ …… 高崎市保渡田・井出町の「二子山古墳」を中心にした古墳群

■Eグループ …… 前橋市の「前二子古墳」を中心にした古墳群

図13　群馬県（かみつけの）の古墳群

（石野博信編『全国古墳編年集成』（雄山閣出版、


佐位
新田
西部
東部
山田
邑楽
参考とする古墳
備考
寺山
太田八幡山
朝子塚
宝泉茶臼山
御富士山
米沢
丸塚山
二ツ山
中原
鶴山
太田天神山
女体山
鳥崇神社
洞山
椿現山2号
蛇塚
上淵名雷電神社
雙児山
二ツ山1号
二ツ山2号
九合60号
亀山京塚
東矢島観音山
鞠地山
九合57号
九合105号
塚廻り4号
塚廻り3号
塚廻り2号
塚廻り1号
藤本観音山
西丘神社
本矢場
薬師塚
古海松塚11号
天神二子
古海原前1号
筑波山
赤岩堂山
熊穴山
祝堂
中里塚
上原
津堂城山
仁徳陵古墳
埼玉稲荷山
市尾墓山
藤ノ木
見瀬丸山
岩屋山
北山茶臼山石釧(1/4)
元島名将軍塚土器(1/16)
御富士山長持形石棺(1/100)
前二子須恵器(1/10)
八幡観音塚須恵器(1/10)
熊穴岩山家形石棺(1/100)
山ノ上板石切石積石室(1/250)
縮尺
0
200m

つけの）の古墳群

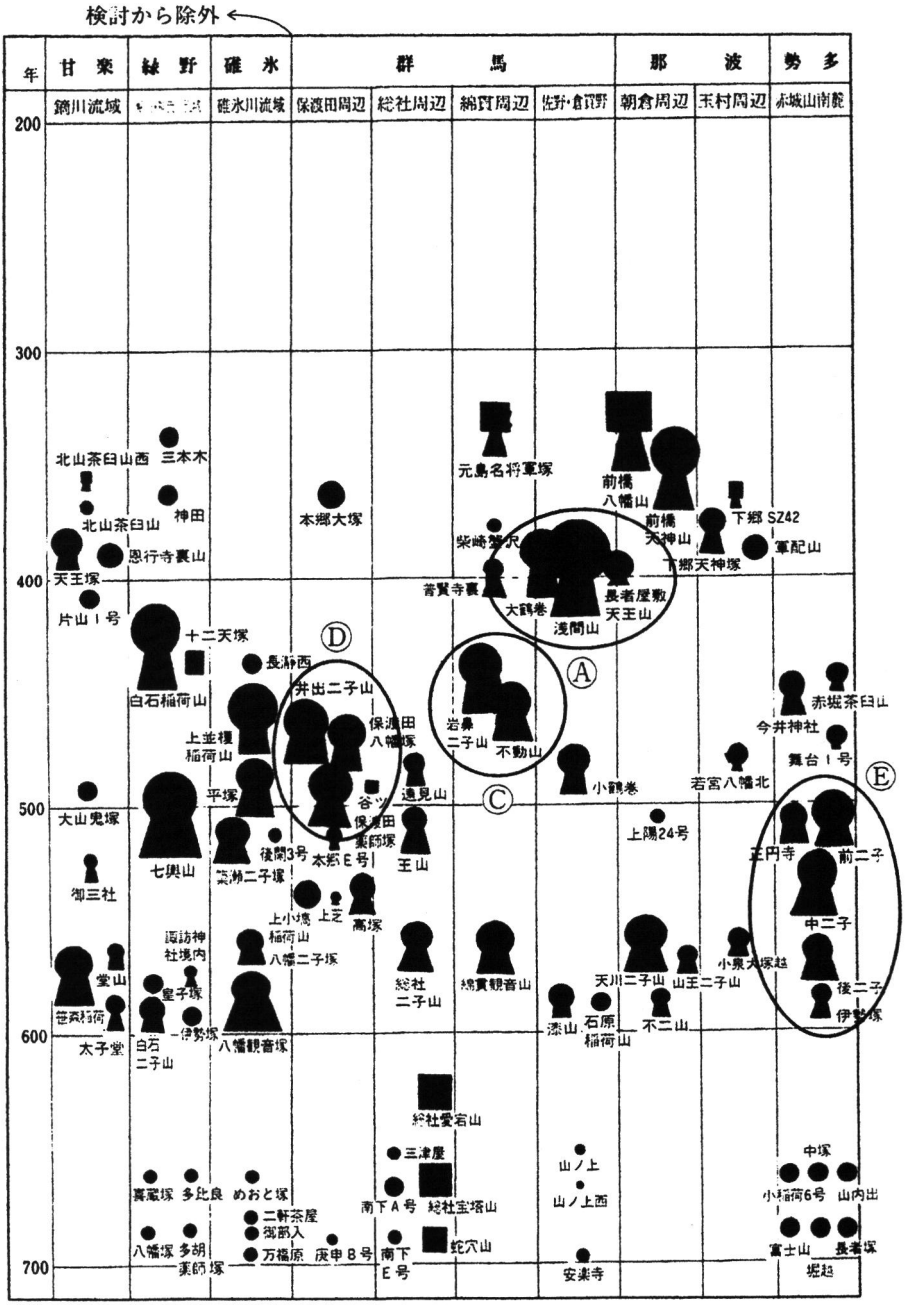

検討から除外
年
甘楽
碓氷
群馬
那波
勢多
鏑川流域
碓氷川流域
保渡田周辺
総社周辺
綿貫周辺
佐野・倉賀野
朝倉周辺
玉村周辺
赤城山南麓
200
300
400
500
600
700
北山茶臼山西
三本木
神田
北山茶臼山
恩行寺裏山
天王塚
片山1号
十二天塚
白石稲荷山
長瀬西
上並榎稲荷山
平塚
大山鬼塚
七輿山
御三社
後閑3号
築瀬二子塚
諏訪神社境内
堂山
星子塚
笹森稲荷
太子堂
白石二子山
伊勢塚
八幡観音塚
八幡二子塚
本郷大塚
井出二子山
保渡田八幡塚
本郷E号
上芝
上小鳥稲荷山
高塚
遺見山
王山
総社二子山
総社愛宕山
三津屋
南下A号
総社宝塔山
南下E号
蛇穴山
寡蔵塚
多比良
八幡塚
多胡
薬師塚
めおと塚
二軒茶屋
御部入
万福原
庚申8号
元島名将軍塚
柴崎蟹沢
菩賢寺裏
大鶴巻
浅間山
長者屋敷
天王山
岩鼻二子山
不動山
綿貫観音山
小鶴巻
山ノ上
山ノ上西
安楽寺
漆山
石原稲荷山
前橋八幡山
前橋天神山
下郷天神塚
下郷SZ42
軍配山
若宮八幡北
上陽24号
天川二子山
山王二子山
不二山
小泉大塚越
赤城茶臼山
今井神社
舞台1号
正円寺
前二子
中二子
後二子
伊勢塚
中塚
小稲荷6号
山内出
富士山
長者塚
堀越
A
B
C
D
E

図13　群馬県（かみ

1995年))
(71号　p56、57)

(2) 群馬県高崎市「綿貫地方」の征服

「5世紀後半」になると「倭王権（倭の五王）」は高崎市にまで侵攻して「Cグループ」を形成する。

「Cグループ」の「岩鼻二子山古墳」「不動山古墳」は「舟形石棺」である。

「Cグループ」の武将は高崎市の地に骨を埋めるように命じられたのであろう。武将は故郷の石棺に埋葬されたいと願う。しかし、石棺を「熊本県玉名」から高崎市まで運ぶのは大変である。そこで関東の石工に造らせたのであろう。「北肥後I型」であるが形状は少し異なる。

「462年」に「倭王興」は即位すると、その翌年（463年）に「吉備王権」を滅ぼして、「中国地方ルート」を開拓する。大量の兵士・武器・食料等を運ぶことが可能になる。

「Cグループ」はおそらく「463年」以降に「倭王興」によって「関東」征伐を命じられたのであろう。「Cグループ」は「熊本県玉名」から派遣されて高崎市に来ている。

□「Cグループ」は「Aグループ」「Bグループ（古市王権）」を征服する。

(3) 群馬県高崎市「保渡田地方」の征服

「保渡田古墳群」（ウィキペディア）は「保渡田（ほどた）古墳群」について次のように紹介している。

○保渡田（ほどた）古墳群

5世紀代の後半も終わりに近い頃から6世紀前半代にかけて、二子山古墳・八幡塚古墳・薬師塚古墳がこの順に築造される。

「保渡田（ほどた）古墳群」（ウィキペディア）

「5世紀後半以降」に群馬県高崎市に「保渡田古墳群」が造られる。「Dグループ」の誕生である。

「Dグループ」の最初の古墳は「井出二子山古墳」である。この古墳が誕生すると群馬県の他の地域では古墳の築造が終わる。

二子山古墳・八幡塚古墳・薬師塚古墳からは「舟形石棺」が出土している。

「倭王権」の「江田王」が造る石棺である。「倭王権」の「Dグループ」も「熊本県玉名」から派遣されていることが分かる。

「Dグループ」は本格的な征伐隊であろう。群馬県（上毛野）の地をすべて征服している。

「倭王権」はさらに「群馬県赤城山南麓」に「Eグループ」を樹立する。「Eグループ」の古墳は「Ⅲ型前方後円

墳」である。「倭王権」の古墳である（76号）。

「Eグループ」の進出により、「群馬県（上毛野）」は「横穴式石室」になる。「横穴式石室」は「筑紫」に最初に取り入れられている。それが九州に広まる。したがって「Eグループ」は「倭王権」が派遣した武将の墓である。

「Eグループ」は「倭王権」の「Dグループ」も吸収して、「赤城山南麓」を中心にして「群馬県（上毛野）」の全域を支配する。

□「5世紀後半」以降に、「倭王興」は「関東」の「群馬県（上毛野）」を完全に征服する。

■「倭王興」は「近畿地方」の征服に専念しているので、「江田王」の子孫を「関東地方」の征伐に任じたのであろう。

■「江田王」の子孫が「関東地方」を征伐している。（舟形石棺）

■「倭王興」は「近畿地方」の征服を終えると直ちに「関東地方」に来ている。

5 「倭王興」の墓

(1) 埼玉古墳群

「埼玉古墳群」には丸墓山古墳、稲荷山古墳、二子山古墳、将軍山古墳、愛宕山古墳、瓦塚古墳、鉄砲山古墳、奥の山古墳、中ノ山古墳等がある。

ホームページ『埼玉古墳群』は次のように記す。

「5世紀末」から「6世紀末」の100年間にわたって、狭い地域に大型古墳が周濠を接するような近さで、一貫した計画性を以て次々と築造されたのは何故か。大和地方の天皇陵クラスの大古墳にしか見られない二重周濠が、巡らされているのは何故か、中堤（ちゅうてい）に造り出しを持つ古墳が多いのは何故か。

ホームページ『埼玉古墳群』

さらにこれらの古墳について次のように記す（概略）。

○稲荷山古墳（「金錯銘鉄剣」の出土で全国的に知られている古墳）

・規模…全長120m、後円部の直径…62m、高さ…11・7m。

・前方部の幅…74m、高さ…10・7m。

・築造…5世紀末

・古墳全体が長方形の二重の周濠に囲まれている。墳丘の西側および中堤の西側に、「造出し」と呼ばれる祭祀のための方形区画があり、人や人物をかたどった形象埴輪や土管のような形の円筒埴輪が大量

に見つかった。（中略）

・後円部の頂上から2つの埋葬施設が発見された。一つは粘土槨で、もう一つは船の形に掘った竪穴に河原石を貼り付けその底に棺を置いた礫槨（れきかく）である。（中略）

・礫槨から「金錯（きんさく）銘鉄剣」が出土した。

・出土遺物…画文帯環状乳神獣鏡、金銅製帯金具（バックル）、翡翠の勾玉、銀環（イヤリング）、轡（くつわ）や杏葉（ぎょうよう）などの馬具、挂甲（けいこう）や矛、鏃（やじり）などの武器、鉄斧などの工具等

・馬具や武具の出土から被葬者は武人であったことが分かる。

(2) 稲荷山古墳出土の鉄剣銘

稲荷山古墳の「礫槨」から出土した鉄剣には金象嵌の銘文が刻まれている。銘文は鉄剣の表と裏にある。

（表）
辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意冨比垝其児多加利足尼其児名弖已加利獲居其児名多加披次獲居其児名多沙鬼獲居其児名半弖比
（裏）
其児名加差披余其児名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来至今獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也

銘文の読みは人により異なるが、『稲荷山古墳と埼玉古墳群』（三一書房）に岸俊男氏等による読みがある。

（表の訳）
辛亥の年七月中、記す。オワケの臣。上祖、名はオホヒコ。其の児、（名は）タカリのスクネ。其の児、名はテヨカリワケ。其の児、名はカタヒ（ハ）シワケ。其の児、名はタサキワケ。其の児、名はハテヒ。

（裏の訳）
其の児、名はカサヒ（ハ）ヨ。其の児、名はオワケの臣。世々、杖刀人の首と為り、奉事し来り今に至る。ワカタケ（キ）ル（ロ）の大王の寺、シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也。

「獲加多支鹵大王」は「ワカタケル」と読んでいる。「ワカタケル大王」である。

(3) 稲荷山古墳の被葬者

「辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意冨比垝（オオヒコ）」とある。「意冨比垝」は「大彦」であろう。

鉄剣を作った人物は「乎獲居臣」である。「乎獲居臣」は「大彦」の子孫であるという。

「大彦」は「倭城」の「卑弥氏」である。「285年」頃、「崇神天皇」を遼西から日本へ連れてきた人物である。

大彦の子孫は倭城に留まった人もいた。「390年」頃、倭城から筑後の八女郡広川町に逃げてきて「倭国」を樹立する。「倭王讃・珍」である。

「関東地方」は「倭王権」が征服している。したがって「乎獲居臣」は「倭王讃・珍」とともに「倭城」から逃げてきた人物の子孫であろう。

(4) 稲荷山古墳と「倭王興」

鉄剣が出土した稲荷山古墳の「礫槨（れきかく）」は古墳の頂上に造られている。「追葬墓」である。

「2016年」に「稲荷山古墳」にレーダー探査が行われた。後円部の中軸線上の深さ2・5mのところに長さ約4m、幅約3m、厚さは最大約1mの石棺があるという（朝日新聞2017年1月27日）。

巨大な石棺が埋められている。王の墓であろう。

この石棺が「稲荷山古墳」の主の石棺である。

「稲荷山古墳」は「5世紀末」頃の古墳であるという。

「倭王興」の在位は「462年～477年」である。墓が作られるのは「5世紀末」頃になる。

□「稲荷山古墳」は「倭王興」の墓であろう。

■「金錯銘鉄剣」が出土した「礫槨」は追葬である。

■「辛亥」年は「531年」である。

（注）「歴史学」「考古学」は「辛亥年＝471年」説である。鉄剣銘には「乎獲居臣」は「獲加多支鹵大王が天下を治めるのを佐（助）けた」とある。しかし「倭王武（ワカタケル）」が即位するのは「478年」である。「471年」は「倭王武」は未だ即位していない。

このような誤りを犯すのは「倭の五王」の在位を解明していないからである。

□「倭王興」は「中国地方ルート」を開拓し、「近畿地方」、「日本海沿岸」、「東日本」を征服した偉大な「大王」である。

6 「倭王興」と百済

(1) 百済の滅亡

「475年」に百済は高句麗に滅ぼされる。

（雄略）二十年（476年）、『百済記』に云う、「蓋鹵王の乙卯年（475年）の冬、狛（高句麗）の大軍、

来たりて、大城を攻めること七日七夜。王城降り陥（おち）て、遂に尉禮を失う。国主および大后・王子等、皆敵の手に没す」という。　『日本書紀』

「百済」は「475年」に滅びる。

(2) 「倭王興」による「百済」の再興

「倭王興」は百済の再興を計る。

（雄略）二十一年（477年）三月、天皇、百済が高麗の為に破られると聞いて、久麻那利（くまなり）を以て汶洲王に賜いて其の国を救い興す。　『日本書紀』

「倭王興」は「汶洲王」に朝鮮半島の土地を与えて「百済」を再興する。

□「477年」に「倭王興」は百済を再興する。

(3) 「百済再興」と「倭王興」

前述の「百済滅亡」の記事には「百済が高麗の為に破られると聞いて」とある。「倭王興」は直接聞いていない。「百済が滅亡した」という報告を聞いているのであろう。それは「倭王興」が「関東」に居るからであろう。

「百済を再興」するには「朝鮮半島の現状」や、「百済の現状」等について知る必要がある。また「百済王」を誰にしたらよいのか。「百済王」になるのにふさわしい人物の情報も必要になる。知りたい情報は次々と膨らんでいく。

「倭王興」は本拠地（八女市）に居る「弟のワカタケル」に次々と質問することになる。それを伝える使者は何度も「九州」と「関東」を往復する。「倭王興」が判断するまでには多くの時間が必要になる。そのため「百済再興」に「2年」も掛かったのであろう。

□「倭王興」はその年の「477年」に「埼玉」で死去して「稲荷山古墳」に埋葬される。

第7章　倭王武

1　「倭の五王」による全国支配の検証

(1) 「筑紫舞」

「筑紫舞」という舞がある。西山村光寿斉氏が伝えている舞である。古田武彦氏が『よみがえる九州王朝』（角川選書）の中で詳しく紹介している。

筑紫舞の中で中心になる舞は「翁」であり、三人立・五人立・七人立・十三人立の舞があるという。西山村光寿斉氏は十三人立は習わなかったという。筑紫舞の「翁」では諸国の翁が集まって諸国の舞を舞うという。

○三人立
肥後の翁、加賀の翁、都の翁

○五人立
肥後の翁、加賀の翁、都の翁、難波津より上がりし翁、出雲の翁

○七人立
肥後の翁、加賀の翁、都の翁、難波津より上がりし翁、尾張の翁、出雲の翁、夷の翁

「筑紫舞」は筑紫地方の舞であろう。ところが筑紫舞には「筑紫の翁」は出てこない。

三人立・五人立・七人立の登場人物をみると「都の翁」がすべてに出ている。「都の翁」が「筑紫の翁」ではないだろうか。

「都」は「倭王権（倭の五王）」の本拠地である「筑後（八女市付近）」であろう。「都の翁」は「倭の五王」である。

筑紫舞は終始「肥後の翁」が中心になって舞が進行するという。西山村光寿斉氏は何故、「肥後の翁」が中心なのかと師匠に尋ねたが、師匠からは教えてもらえなかったという。

「筑紫舞」であるのに「肥後の翁」が中心になって舞が進行するのは「肥後の翁」は「江田王」ではないだろうか。

「七人立の舞」に出てくる翁は「肥後の翁・加賀の翁・都の翁・難波津より上がりし翁・尾張の翁・出雲の翁・夷の翁」である。これらの翁はその地域の王であろう。「筑紫舞」は「各地の翁（王）」が筑後へ参上して「都の翁」に各地の舞を披露しているのであろう。

「筑紫舞」は「都の翁」が全国を支配していることを示している。

「都の翁」は「肥後」「加賀」「難波」「尾張」「出雲」「夷（関東）」を支配している。「十三立」もあるという。日本全国を支配している。

それを「肥後の翁」が仕切っている。

「倭王武」の即位前に「讃・珍・済・興」の「4人」が全国を征服して支配している。したがって「都の翁」は「倭王武」であろう。

「肥後の翁」は「无利弓」であろう。

「无利弓（肥後の翁）」は「倭王武」の養育をしている。その関係が続いているのであろう。「无利弓」は「倭王武」に替わって「全国の王」に指示を出している。それが「筑紫舞」の特徴である。

□「筑紫舞」は「无利弖」によって呼び出された「全国の倭王権」の「王」が「獲加多支鹵大王」を讃える様子を表現しているのであろう。

(2) 「筑紫舞」の翁の古墳

「筑紫舞」は「獲加多支鹵大王（倭王武）」の時代であり、「无利弖」が「倭王武」に仕えている時期である。

その後「无利弖」は江田に帰り、「江田船山古墳」の「追葬1」として埋葬される。その時期は「5世紀末～6世紀初頭」である。

「筑紫舞」に出てくる「翁」の古墳も同じころの古墳であろう。

「5世紀末～6世紀前半」頃に築造された「筑紫舞」の翁の古墳を探してみよう。

○「肥後の翁」…　江田船山古墳の追葬1回目の「无利弖」であろう。

○「加賀の翁」…「筑紫舞」の「2番目」に常に登場している。「獲加多支鹵大王」よりも先に紹介されている。「獲加多支鹵大王」が一目置いている人物ということになる。「倭の五王」は「倭城」から渡来している。「大彦」の子孫である。『日本書紀』に「大彦命は是阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狭狭城山君・筑紫国造・越国造・伊賀臣、凡そ七族の始祖なり」とある。「大彦」は崇神天皇により「越（加賀）」に派遣される。「加賀の翁」はその子孫であろう。「加賀の翁」の方が本家ということになる。そのため「獲加多支鹵大王」も一目置いているのであろう。

「六世紀初頭」頃の古墳に「二本松山古墳」がある。銀メッキ製の王冠が出土している。二本松山古墳の主は「加賀の翁」であろう。

「筑紫舞」の三人立は「肥後の翁、加賀の翁、都の翁」である。この三人の翁は「王族」であろう。「大彦」の子孫である。

○「出雲の翁」…　出雲地方の王であろう。出雲地方には北部九州系の古墳が造られる。「倭王権」により派遣された武将の墓であろう。

○「夷（えびす）の翁」…　時期からみて埼玉古墳群の「二子山古墳」の主であろう。「二子山古墳」は「岩戸山古墳（倭王武の墓）」と同形・同大である（後述）。「倭王興」の長子であり、倭王武の甥ではあるが年上であろう。そのため「倭王武」と同じ墓を作っているのであろう。

○「尾張の翁」…　尾張地方の王であろう。

名古屋台地は5世紀後半から突如として周濠のある古墳が造られる。「倭王権」によって派遣された武将の墓であろう。「倭王興」は「尾張地方」を征服して、「関東」の征服に向かっている。

獲加多支鹵大王と同時代の古墳に「断夫山古墳」がある。他と較べて圧倒的に大きい。「尾張の翁」は「断夫山古墳」の主であろう。

○「難波津より上がりし翁」…　難波（摂津、河内）地域を支配する王であろう。継体天皇の墓であるといわれている今城塚古墳の石棺は阿蘇ピンク石製石棺である。「宇土王」の墓であろう。今城塚古墳の近くの淀川中流域には「筑紫津」があり、筑紫君（倭王権）が派遣した軍船が停泊していたと言われている（森田克行）。また「筑紫津神社」がある。「倭王権」の神を祀っているのであろう。「難波津から上る」とあるが難波だけではなく畿内一帯を支配していると考えられる。淀川水系、および大和川水系も支配しているのであろう。「難波津より上がりし翁」は「継体天皇の父」であろう。「今城塚古墳」は「継体天皇の父」の古墳であり、「継体天皇」は追葬である。

□「筑紫舞」の「翁」とその古墳

翁	支配地域	墓
■都の翁　獲加多支鹵大王	全国	岩戸山古墳
■肥後の翁　无利弖	肥後	江田船山古墳（追葬）
■加賀の翁　二本松山古墳の主　越		二本松山古墳
■難波津より上がりし翁　継体天皇の父	近畿	今城塚古墳
■夷の翁　二子山古墳の主	関東	二子山古墳
■尾張の翁　断夫山古墳の主	尾張	断夫山古墳
■出雲の翁　（？）	出雲	（？）

□「筑紫舞」は「倭王権」が全国を支配していることを示している。

2　「倭王武」と年号

(1)　「倭王武」の朝貢

倭王武は中国王朝へ3回も朝貢している。

第1回目は即位したときの「478年」である。

興死弟武立。自称使持節都督倭百済新羅任那加羅秦韓慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王。順帝昇明二年、遣使上表曰、封国偏遠作藩于外。　『宋書』倭国伝

（訳）倭王興が死して弟の武が立つ。自ら使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王を称す。順帝の昇明二年（478年）、（倭王武）使いを遣わし上表して曰く、「封国は偏遠にして藩を外に作る。（中略）」という。

「倭王武」は「七国諸軍事」を自称している。

「倭王済」の「六国諸軍事」に「百済」を追加している。前年の「477年」に「倭王興」が「百済」を再興しているからであろう。

第2回目は「斉」へ朝貢している。

建元元年（479年、高帝）進めて新たに使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・（慕韓）六国諸軍事、安東大将軍倭王武に除し、号して鎮東大将軍と為す。　『南斉書』

新「王権」の「斉」は「倭王武」の自称を認めず、前「王権（宋）」が正式に認めている「倭王済」の「六国諸軍事」を採用している。

第3回目は「梁」へ朝貢している。

天監元年（502年）、鎮東大将軍倭王武を進めて征東将軍に進号せしむ。　『梁書』

「倭王武」は3回も朝貢している。何故であろうか。

第1回目は即位してすぐ朝貢している。ところが「宋王朝」は翌年「479年4月」に「斉」に禅位する。

（順帝）昇明三年（479年）四月、禅位于斉。　『宋書』帝紀

中国の南朝は「宋」から「斉」へ交代する。

宋が斉へ禅位するのは「479年4月」であるから「倭王武」は直ちに「斉」へ朝貢している。

「斉」は「502年3月」に「梁」へ禅位する。

（和帝）中興二年（502年）三月、禅位梁王。　『南斉書』帝紀

「倭王武」は、またも直ちにその年の「502年」に「梁」へ朝貢している。

中国の王朝が交代すると「倭王武」は直ちに新しい王朝

へ朝貢している。これが当時の「中国王朝」と「倭国」の関係である。

(2) 朝貢の中断

「倭王武」は「502年3月」に「斉」から「梁」へ交代すると直ちに朝貢している。

ところがその後は朝貢をしていない。

倭王武の先祖を見ると同じ「宋王朝」へ「2〜3回」は朝貢している。

○「倭の五王」の「宋」への朝貢

■倭王珍　430年、438年

■倭王済　443年、451年、460年

■倭王興　462年、477年

倭王武の先祖は「8〜15年」の間隔で同じ「宋王朝」へ朝貢している。

ところが「倭王武」は「502年」に「梁」へ朝貢した後は「525年」に死去するまでの「23年間」も朝貢をしていない。「梁王朝」は「502年〜557年」まで続いている。

日本列島から次に中国王朝へ朝貢するのは「600年」の隋の時代である。「約100年間」は日本列島から中国王朝への朝貢は途絶えている。何故、倭王武は朝貢を中止したのであろうか。

それは中国王朝が度々交代するからであろう。

「倭王武」は「478年4月」以前に即位すると「478年5月」に宋王朝へ朝貢している。ところが「宋王朝」は翌年の「479年4月」に「斉」へ禅位する。「倭王武」にとってはショックだったであろう。

さらに「斉」は「502年3月」に「梁」へ禅位する。「倭王武」はまたも大きなショックを受ける。

中国王朝はめまぐるしく交代する。中国王朝は信頼できない。「倭王武」はこのように考えたのではないだろうか。

そのため「倭王武」は中国王朝への朝貢をしばらく控えることにしたのであろう。

(3) 「倭王武」と「年号」

「倭王武」は「年号」を建てている。

鶴峰戊申（しげのぶ）の『襲国偽僭考』「九州年号」にその「年号」がある。

○九州年号

■継体天皇十六年、武王、年を建て善記という。是九州年号のはじめなり。

■年号　九州年号。けだし善記より大長にいたりて、およそ一百七十七年。其の間、年号連綿たり。（略）

●善記　襲の元年。継体天皇十六年壬寅。梁の普通

三年にあたる。（中略）善記四年に終わる。

●正和　継体天皇二十年丙午。正和元年とす。（中略）正和五年に終わる。

●殷到　継体天皇二十五年辛亥。殷到元年とす。（中略）如是院年代記、教到に作る。同書に、教到元、始めて暦を作る、とあるもまた襲人のしわざなるべし。一説に正和と殷到との間に定和・常色の二年号あり。いわく定和、七年に終わる。常色、八年に終わる。　『襲国偽僣考』

「倭王武」は年号を建てている。「九州年号のはじめなり」とある。「倭王武」は日本で初めて年号を建てている。

「梁の普通三年」は「５２２年」である。

「倭王武」の年号は「善記」であり、「善記」は「５２２年～５２５年」である。「倭王武」は「５２２年」に初めて年号を建てて、「５２５年」に死去している。

次の「正和」年号は「５２６年～５３０年」である。「倭王武」の次の「倭王」の年号であろう。

□「倭王武」の在位は「４７８年～５２５年」であることが判明する。

（注）歴史学者は「倭王武＝雄略天皇」説である。雄略天皇は「４７９年（あるいは４８９年）」に死去している。

したがって「５０２年」の「鎮東大将軍倭王武を進めて征東将軍に進号せしむ」は中国王朝が「倭王武」は死去しているのを知らないで「進号」したとしている。

「歴史学者」は『襲国偽僣考』を偽書として検討もしないで切り捨てているからである。「日本の歴史」は大きく狂っている。

(4) 中国からの独立

「年号」を建てることが出来るのは「天子」だけである。

「倭王武」は「天子」になっている。

中国の「天子」に対抗して「倭王武」は「天子」になっている。中国から独立したのである。

「倭国」は「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平らげること九十五国」というように多くの国々を征服している。

自分（倭王武）はこれらの国々を支配している。中国王朝に頼る必要はない。「倭王武」はこれらの国々を「天子」として統治することを考えたのであろう。

その直接のきっかけは「５２１年」に「百済国」が朝貢して「寧東大将軍」になったことであろう。

この年（５２１年）、高祖は詔して、「行都督諸軍事・鎮東大将軍餘隆は蕃屏として海外にあり、（中略）ここに栄ある官爵を授け、使持節都督百済諸軍事寧東大

将軍百済王とする」という。
『梁書』（訳文は『東アジア民族史Ⅰ（東洋文庫）』による）

「倭王武」は「502年」に「征東将軍」になっている。その後は朝貢を中止している。「称号」は「征東将軍」のままである。「征東将軍」より「寧東大将軍」の方が位は上になる。

「百済」は「475年」に滅びたとき、兄「倭王興」が「百済」を再興している。「百済」はその後も「倭国」の支配下にある。それが逆転することになる。

「倭王武」はこれには耐えられず、対抗するために「522年」に自ら「天子」となり、中国から独立したのであろう。

□「倭王武」は「天子」になり、「年号」を建てる。
■「522年」に「倭王武」は「天子」になり、中国から独立する。
■中国王朝への朝貢は中止する。
■「倭王武」の年号は「善記」（522年～525年）である。
■「善記」年号から連綿と「年号」は続く。「九州年号」と言われている。

3 「倭王武」の墓

(1) 岩戸山古墳

『筑後国風土記』は「磐井の墓」として次のように伝えている。

上妻郡。郡の南二里に筑紫君磐井の墓あり。墳高七丈、周六十丈。墓田（墓の廣さ）は南北各六十丈、東西各四十丈。石人・石盾各六十枚、交陣し行を成し四面を周る。東北の角に一つの別区が有り、号して衙頭（がとう）という（衙頭は政所なり）。其の中に一つの石人有り。（中略）また石馬三匹、石殿三間、石蔵二間有り。

『風土記』

（注）「筑紫君磐井の墓あり。墳高七丈」と読むのは森浩一氏による。

『風土記』は「筑紫国造磐井」を「筑紫君」と記す。「倭王権（倭の五王）」である。

「東北の角に一つの別区が有り、号して衙頭（がとう）という（衙頭は政所なり）。其の中に一つの石人有り。（中略）また石馬三匹、石殿三間、石蔵二間有り」と記す。

「石人・石馬」文化の頂点にある古墳といえる。「倭王権」

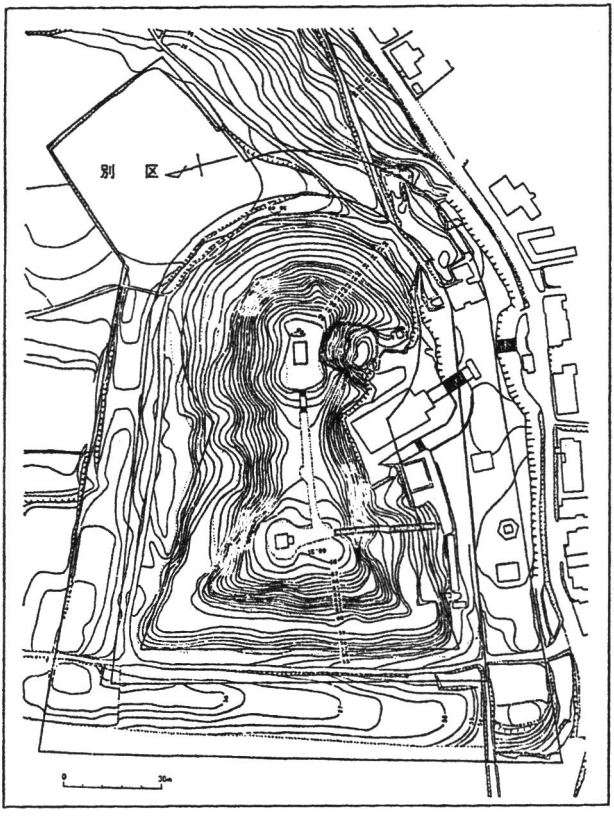


図14　岩戸山古墳

の「王墓」である。

森貞次郎氏はこれが福岡県八女市の「岩戸山古墳」であることを実証した。

図14　岩戸山古墳
（62号）

「岩戸山古墳」は次のような古墳である。

○福岡県八女市吉田の東西に走る八女丘陵上に位置する。
○墳丘は全長95ｍ、後円部径70ｍ、高さ13・５ｍ
○墳丘周囲には幅約20ｍの周堀と外堤を持つ。
○外堤まで含めた総長は１７６ｍに達し、北部九州最大の古墳。
○東北隅に外堤に続く一辺43ｍの方形の区画がある（別区）。
○内部主体は不明である。
○墳丘・別区から武装石人・裸体石人・馬・猪・鶏・水鳥・翳・きぬがさ・大刀・坩・靫などの各種の破片が発見された。
○６世紀前半の築造　『日本古墳大辞典』（東京堂出版）

(2)　「倭王武」の墓＝岩戸山古墳

「岩戸山古墳」は「八女丘陵」にあり、「６世紀前半の築造」であるという。しかも「北部九州最大の古墳」である。「北部九州」を支配した「王の墓」であろう。

「八女丘陵」は「倭王権（倭の五王）」の本拠地である。

「倭王武」の在位は「４７８年～５２５年」である。「岩戸山古墳」は「倭王武」の墓であろう。

□「岩戸山古墳」は「倭王武」の墓である。
■岩戸山古墳は未発掘である。
■おそらく墓誌があり、「獲加多支鹵大王」「倭王武」「善記」年号が書かれているであろう。

□「倭の五王」の墓（まとめ）
■「倭王讃」の墓…「石人山古墳」
■「倭王珍」の墓…「太田茶臼山古墳」
■「倭王済」の墓…「岡ミサンザイ古墳」
■「倭王興」の墓…「稲荷山古墳」
■「倭王武」の墓…「岩戸山古墳」

4 「倭王興の長子」の墓

(1) 二子山古墳

「二子山古墳」は「埼玉古墳群」の中にあり、「稲荷山古墳」の次に造られた古墳である。

○二子山古墳（埼玉古墳群の中で最大規模、武蔵全域での最大の古墳）

・規模…全長138m、後円部の直径…70m、高さ…13m

・前方部の幅…90m、高さ…14・9m

・築造…6世紀初頭前後

・稲荷山古墳に次いで築造されたと推定されている。武蔵国（現在の埼玉県、東京都、神奈川県の一部）で最大の前方後円墳。

・長方形の二重の周濠を巡らし、後円部西側の中堤には、台形の造り出しがある。

・直径50cmを超える大型の円筒埴輪が出土。

ホームページ『埼玉古墳群』

「埼玉古墳群」では「5世紀末」に「稲荷山古墳」が築造され、「6世紀初頭前後」に「二子山古墳」が築かれる。「武蔵全域での最大の古墳」であるという。稲荷山古墳より規模は大きい。

(2) 「二子山古墳」と「倭王武」

「稲荷山古墳」は「東日本」を征服した「倭王興」の墓である。それより大きな古墳を造っている。「倭王興」の世継ぎの古墳であろう。

「二子山古墳」は「倭王武」の墓「岩戸山古墳」と同形・同大の古墳である（復元⑤）。

○岩戸山古墳

・全長…132m、後円部径…70m、高さ…13・5m

前方部幅…95m、高さ…13・5m

・墳丘周囲には幅約20mの周堀と外堤を持ち、外堤まで含めた総長は176mに達し、北部九州最大の古墳。

・東北隅に一辺43mの方形の「別区」がある。

・石製品…武装石人、馬、猪、鶏、大刀、その他

「二子山古墳」の被葬者は「倭王武」と同格ということになる。

「倭王興」と「倭王武」は兄弟である。しかし、年の差は「25才」以上も離れていると思われる（69号④）。「倭王武」よりも甥の「二子山古墳」の被葬者の方が年上ということになる。

何故、「二子山古墳」の被葬者が「王位」を嗣がなかっ

たのであろうか。

「倭王権」では「兄弟」継嗣のようである。「倭王讃」が死去したとき弟の「珍」が即位している。「倭王権」では「親子」継嗣ではなく「兄弟」継嗣なのであろう。

「倭王武」は即位したときから年上の「二子山古墳」の被葬者（倭王興の長子）に気を遣っているのであろう。「倭王武」は寿墓（生前に墓を造る）を造っている。「倭王武」は甥に自分と同格であることを示すために寿墓の「岩戸山古墳」と同形・同大の「二子山古墳」を造らせているのであろう。

5　塚坊主古墳

(1)　塚坊主古墳

「塚坊主古墳」は「江田船山古墳」の次に造られた古墳である。

○塚坊主古墳

・江田船山古墳の南にある前方後円墳

・墳長約44m、後円部径約30m、前方部最大幅約21m

・幅約5mの周濠をめぐらす。

・主体部は割石小口積みの横穴式石室で、玄室の奥に家形石棺を安置。

・石棺の内壁に赤の連続三角文が描かれている。

・石室内から鉄鉾1・轡2・木芯鉄板張輪鎧破片1対分・青銅鈴1・尾錠破片1・環状金具1・須恵器破片1。

・周溝内から須恵器・埴輪破片が出土。

・築造は6世紀前半。

『日本古墳大辞典』（東京堂出版）

(2)　无利弓と塚坊主古墳

「江田王二代目」の墓は「市野山古墳」である。「5世紀中葉～後葉」の古墳である。

「塚坊主古墳」は「6世紀前半」の古墳である。「江田王（倭隋）」の子孫の墓であろう。

「无利弓」は「三代目」であり、「江田船山古墳」に追葬されている。その時期は「5世紀末～6世紀初頭」である。

「无利弓」の方が「塚坊主古墳」の主よりも早く死去している。

「无利弓」が「兄」であり、「塚坊主古墳」の主は「弟」であろう。

「无利弓」には「王冠」が副葬されている。「塚坊主古墳」の方には「王冠」は無い。「江田王三代目」は「无利弓」であろう。

□「无利弓」は「江田王三代目」である。

■「倭王済」の要望により、「无利弖」は「倭王権」の本拠地筑後へ行き、「ワカタケル」の養育をしている。
■「典曹人」という「文官」になっている。
■副葬品に「亀甲繋文金銅飾履」がある。まさに「文官」である。
■「亀甲繋文広帯式金銅冠」(王冠)が副葬されている。
■「无利弖」は「王」である。
■したがって「塚坊主古墳」の主は「无利弖」の「弟」であろう。

「塚坊主古墳」の主は「兄」が「ワカタケル」の養育のために筑後へ行ったので「江田」を守る役をしているのであろう。そのため「江田王」ではないのに「塚坊主古墳」を造っているのであろう。

「无利弖」は弟が古墳を造っているので自分は祖父の「江田船山古墳」に埋葬されるのを希望したのであろう。

(3) 「江田王4代目」

「江田船山古墳」には「追葬2」がある。「王冠」を持っている。「6世紀後半」である。

「无利弖」の長子であろう。「江田王4代目」になっている。

「531年」の「磐井の乱」で「倭王権」は滅びる。そのため墓を造らずに「曾祖父」の「江田船山古墳」に追葬されたのであろう。

おわりに

「倭の五王(倭王権)」は「日本列島」を征服し、「朝鮮半島」まで支配した偉大な「王権」である。

ところが今の「日本史」には「倭の五王」が抜けている。あるいは「間違った解釈をしている」という方が正しいのかもしれない。

○「歴史学会」への要望
■日本国民は「倭の五王」を知らない。
■今の「日本史」に「倭の五王」を早急に書き加えるべきである。
■正しい「日本の歴史」を国民に教えるのが「歴史学者」の責務であろう。

A本 … 佃 收 著 早わかり「日本通史」(概要編)
『新「日本の古代史」(佃説)』

□「倭の五王全史料」
古田武彦氏
（『古代は輝いていたⅡ』（朝日新聞社）より）

○『梁書』倭伝
1　晋の安帝（396―418年）の時、倭王賛有り。
○『晋書』安帝紀
2　（晋安帝、義熙九年＝413年）是の歳、高句麗・倭国及び西南の銅頭大師、並びに方物を献ず。
○『太平御覧』香部一、麝条
3　（「義熙起居注」）倭国、貂皮・人参等を献ず。詔して細笙・麝香を賜う。

○『宋書』〔①～⑥は倭国伝、a～iは帝紀〕
4　①高祖の永初二年（421年）、詔して曰く、「倭讃、万里貢を修む。遠誠宜しく甄（あらわ）すべく、除授を賜う可し」と。
5　②太祖の元嘉二年（425年）、讃、又司馬曹達を遣わして表を奉り、方物を献ず。讃死して弟の珍立つ。使いを遣わして貢献し、自ら使持節・都督、倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍・倭国王と称し、表して除正せられんことを求む。詔して安東将軍倭国王に除す。珍、又倭隋等十三人を平西・征虜・冠軍・輔国将軍の号に除せんことを求む。詔して並びに聴（ゆる）す。
6　（a）（文帝、元嘉七年＝430年、春正月）是の月、倭国王、使を遣わして方物を献ず。《珍》
7　（b）（文帝、元嘉十五年＝438年、夏四月）己巳、倭国王珍を以て安東将軍と為す。
8　（c）（文帝、元嘉十五年＝438年）是の歳、武都王・河南国・高麗国・倭国・扶南国・林邑国、並びに使を遣わして方物を献ず。《珍》
9　③二十年（文帝、元嘉二十年＝443年）、倭国済、使を遣わして奉献す。復た以て安東将軍倭国王と為す。
10　（d）（文帝、元嘉二十年、443年）是の歳、河西国・高麗国・百済国・倭国、並びに使を遣わして方物を献ず。《済》
11　④（文帝、元嘉二十八年＝451年）使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東将軍は故の如く、并びに上（たてまつ）る所の二十三人を軍郡に除す。《済》
12　（e）（文帝、元嘉二十八年＝451年）秋七月甲辰、安東将軍倭王済、安東大将軍に進号す。
13　（f）（孝武帝、大明四年＝460年、十二月丁未）倭国、使を遣わして方物を献ず。《済》
14　⑤済死す。世子興、使を遣わして貢献す。世祖の大明六年（462年、孝武帝）、詔して曰く、「倭王世子興、奕世戴（すなわ）ち忠、藩を外海に作（な）し、化

を稟（う）け境を寧（やす）んじ、恭しく貢職を修め、新たに辺業を嗣ぐ。宜しく爵号を授くべく、安東将軍倭国王とす可し」と。

15 （g）（孝武帝、大明六年＝462年、三月）壬寅、倭国王の世子、興を以て安東将軍と為す。

16 （h）（順帝、昇明元年＝477年）冬十一月己酉、倭国、使を遣わして方物を献ず。《興》

17 （⑥）興死して弟の武立ち、自ら使持節都督、倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大将軍倭国王と称す。順帝の昇明二年（478年）、使を遣わして表を上る。曰く、「封国は……（中略）……以て忠節を勤む」と。詔して、武を使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍倭王に除す。

18 （i）（順帝、昇明二年＝478年）五月戊午、倭国王武、使を遣わして方物を献ず。武を以て安東大将軍と為す。

○『南斉書』倭国伝

19 建元元年（479年、高帝）進めて新たに使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・（慕韓）六国諸軍事、安東大将軍倭王武に除し、号して鎮東大将軍と為さしむ。

○『梁書』（①は帝紀、aは倭国伝）

20 （①）（高祖武帝の天監元年＝502年）鎮東大将軍倭王武を進めて征東将軍に進号せしむ。

21 （a）高祖即位し、武を進めて征東将軍と号せしむ。

（古田武彦著『古代は輝いていたⅡ』より）

（添付資料1）

宋書倭国伝

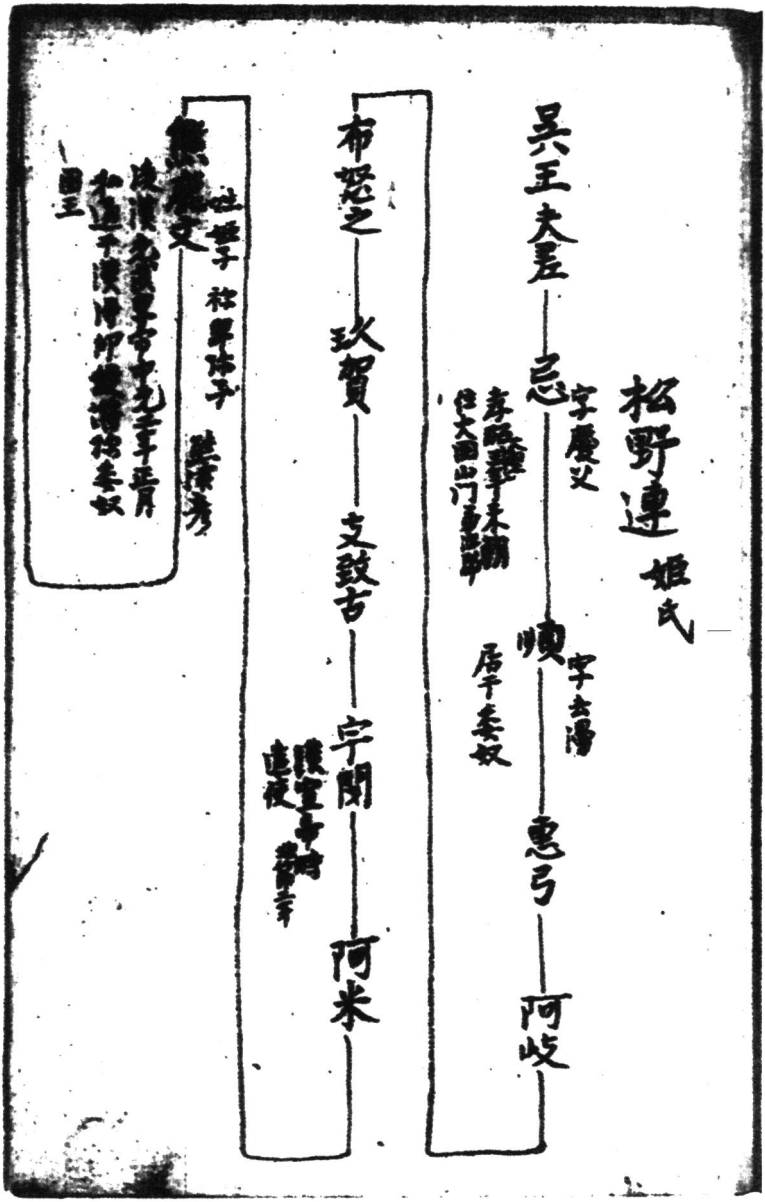
倭國在高驪東南大海中世修貢職高祖永初二年詔曰倭讚萬里修貢遠誠宜甄可賜除授太祖元嘉二年讚又遣司馬曹達奉表獻方物讚死弟珍立遣使貢獻自稱使持節都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭國王表求除正詔除安東將軍倭國王珍又求除正倭隋等十三人平西征虜冠軍輔國將軍號詔並聽二十年倭國王濟遣使奉獻復以為安東將軍倭國王二十八年加使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東將軍如故并除所上二十三人軍郡濟死世子興遣使貢獻世祖大明六年詔曰倭王世子興奕世載忠作藩外海稟化寧境恭修貢職新嗣逸業宜授爵號可安東將軍倭國王興死弟

武立自稱使持節都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事安東大將軍倭國王順帝昇明二年遣使上表曰封國偏遠作藩于外自昔祖禰躬擐甲冑跋涉山川不遑寧處東征毛人五十五國西服衆夷六十六國渡平海北九十五國王道融泰廓土遐畿累葉朝宗不愆于歲臣雖下愚忝胤先緒驅率所統歸崇天極道逕百濟裝治船舫而句驪無道圖欲見吞掠抄邊隸虔劉不已每致稽滯以失良風雖曰進

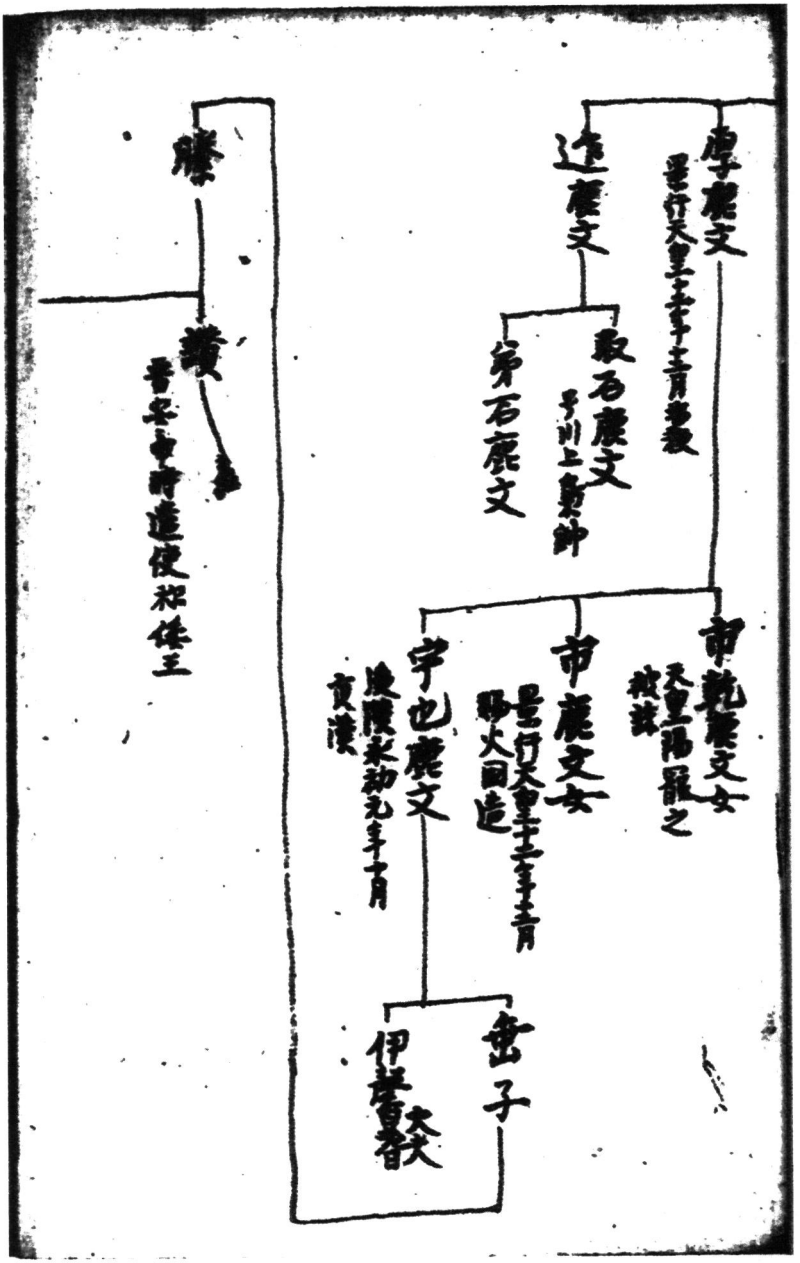
倭国伝

路或通或不臣亡考濟實忿寇讎壅塞天路控
弦百萬義聲感激方欲大舉奄喪父兄使垂成
之功不獲一簣君在諒闇不動兵甲是以偃息
未捷至今欲練甲治兵申父兄之志義士虎賁
文武效功白刃交前亦所不顧若以帝德覆載
權此彊敵克靖方難無替前功竊自假開府義
同三司其餘咸假授以勸忠節詔除武使持節
都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事
安東大將軍倭王

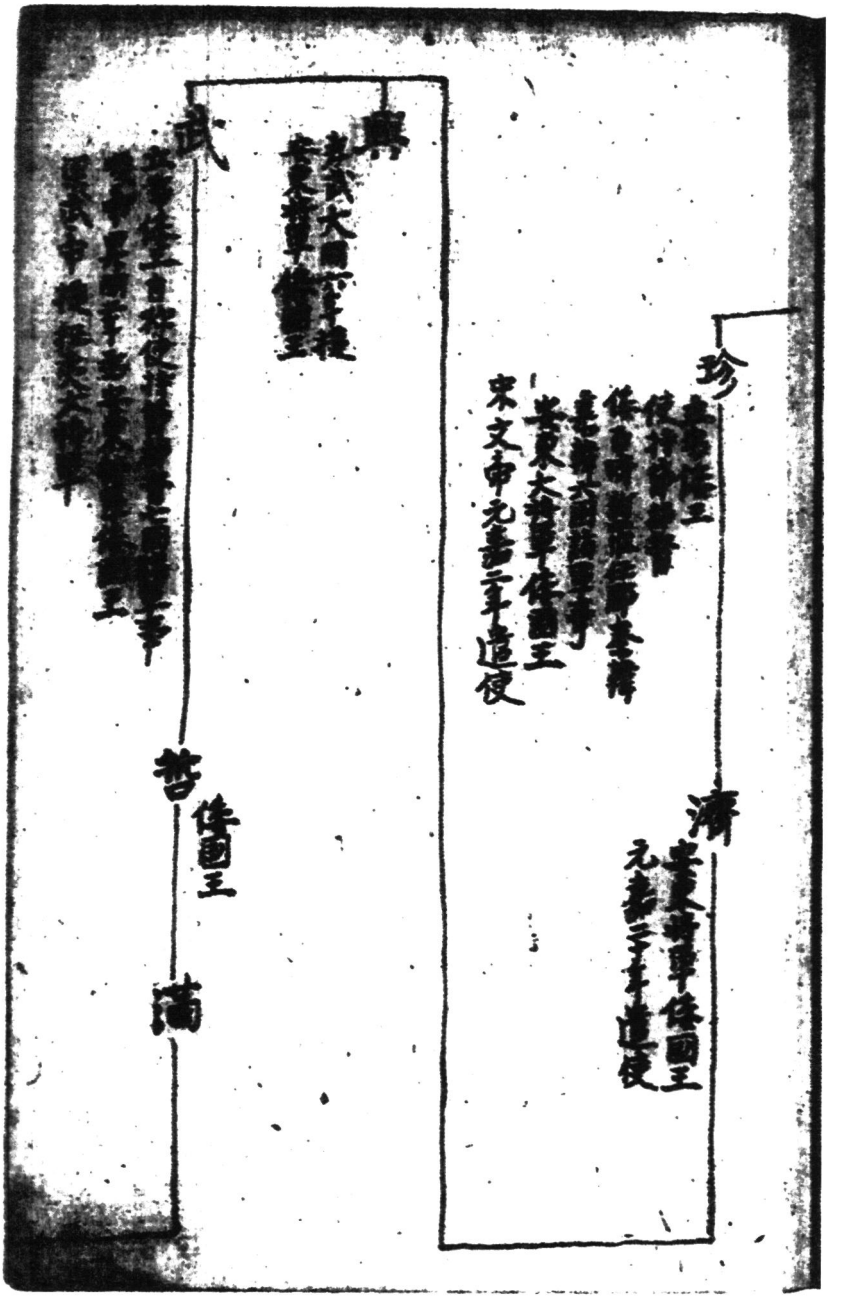
宋書



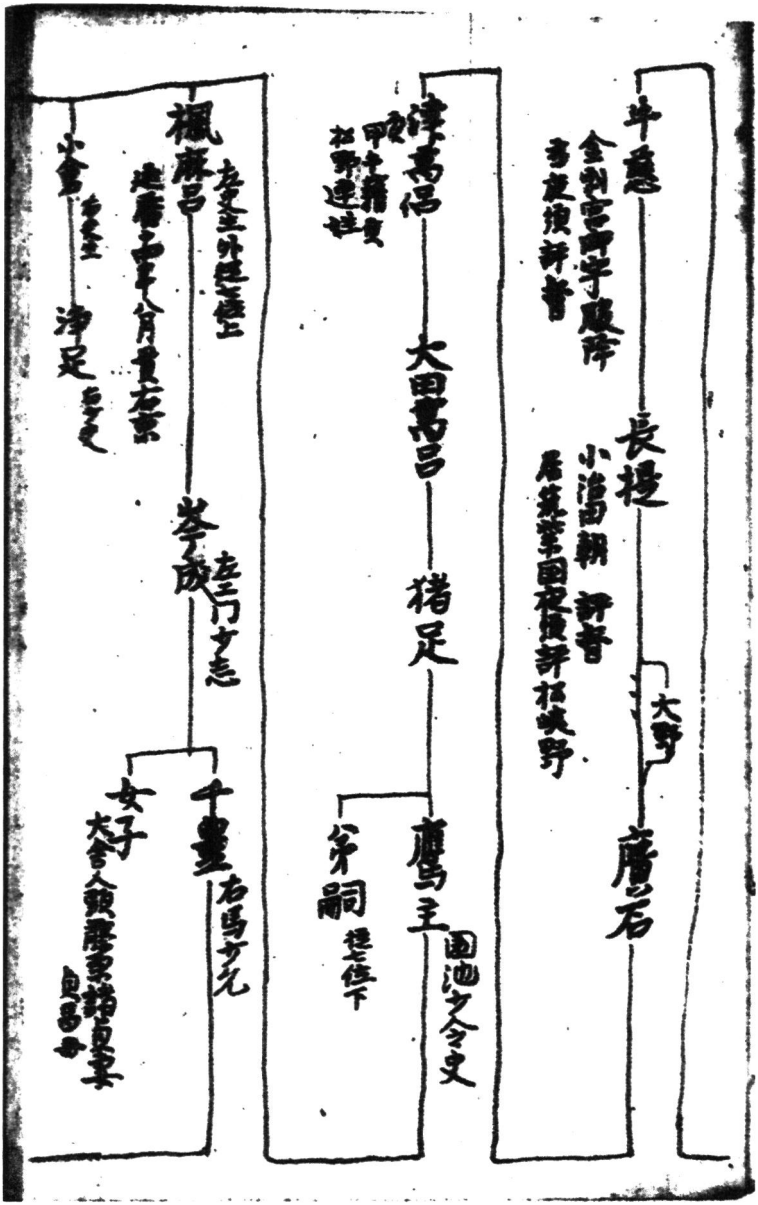
松野連系図－１


虎子麻文
是行天皇三十七年十二月薨
近麻文
取石麻文
子川上勇神
弟石麻文
市乾麻文女
天皇陽羅之
被誅
市麻文女
是行天皇三十七年十二月
聘大国造
宇也麻文
後陳来初九年十月
貢渡
盆子
伊甚賀大人
勝
讃
吾名申時遣使松倭王

松野連系図-2



松野連系図−3



松野連系図−4

（添付資料３）

□古事記の崩年干支

天　皇	干	支	西　暦
崇　神	戊	寅	318
成　務	乙	卯	355
仲　哀	壬	戌	362
応　神	甲	午	394
仁　徳	丁	卯	427
履　中	壬	申	432
反　正	丁	丑	437
允　恭	甲	午	454
雄　略	己	巳	489
継　体	丁	未	527
安　閑	乙	卯	535
敏　達	甲	辰	584
用　明	丁	未	587
崇　峻	壬	子	592
推　古	戊	子	628

○推古天皇の崩年　甲申年（６２４年）三月十五日癸丑日

□「倭の六王」の在位

- 倭王讃　４１３年以前～４２６年
- 倭王珍　４２７年～４４２年
- 倭王済　４４３年～４６１年
- 倭王興　４６２年～４７７年
- 倭王武　４７８年～５２５年
- 倭王蔦　５２６年～５３１年３月

【参考文献】

○佃　收　著

・古代史の提言①『新「日本の古代史」（上）』
（次の号を収録）33号、36号、39号、45号、46号、47号、48号、49号、55号、56号、59号、60号、61号

・古代史の提言②『新「日本の古代史」（中）』
（次の号を収録）53号、54号、62号、63号、64号、65号（2）、66号（2）

・古代史の提言③『新「日本の古代史」（下）』
（次の号を収録）50号、57号、58号、59号、65号（1）、66号（1）、67号（2）、68号、69号（1）、69号（2）、70号（1）、70号（2）

○佃　收　著

・古代史の復元①『倭人のルーツと渤海沿岸』
・古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』
・古代史の復元③『神武・崇神と初期ヤマト王権』
・古代史の復元④『四世紀の北部九州と近畿』
・古代史の復元⑤『倭の五王と磐井の乱』
・古代史の復元⑥『物部氏と蘇我氏と上宮王家』
・古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』
・古代史の復元⑧『天武天皇と大寺の移築』

（注）これらの著書は、出版者が廃業したため一般の書店では販売しておりません。「購入方法」等については次の「ホームページ」をご覧ください。

なお、「古代史の提言」シリーズ、「古代史の復元」シリーズは「ホームページ」で公開しています。

○ホームページ

・tsukudaosamu.com